

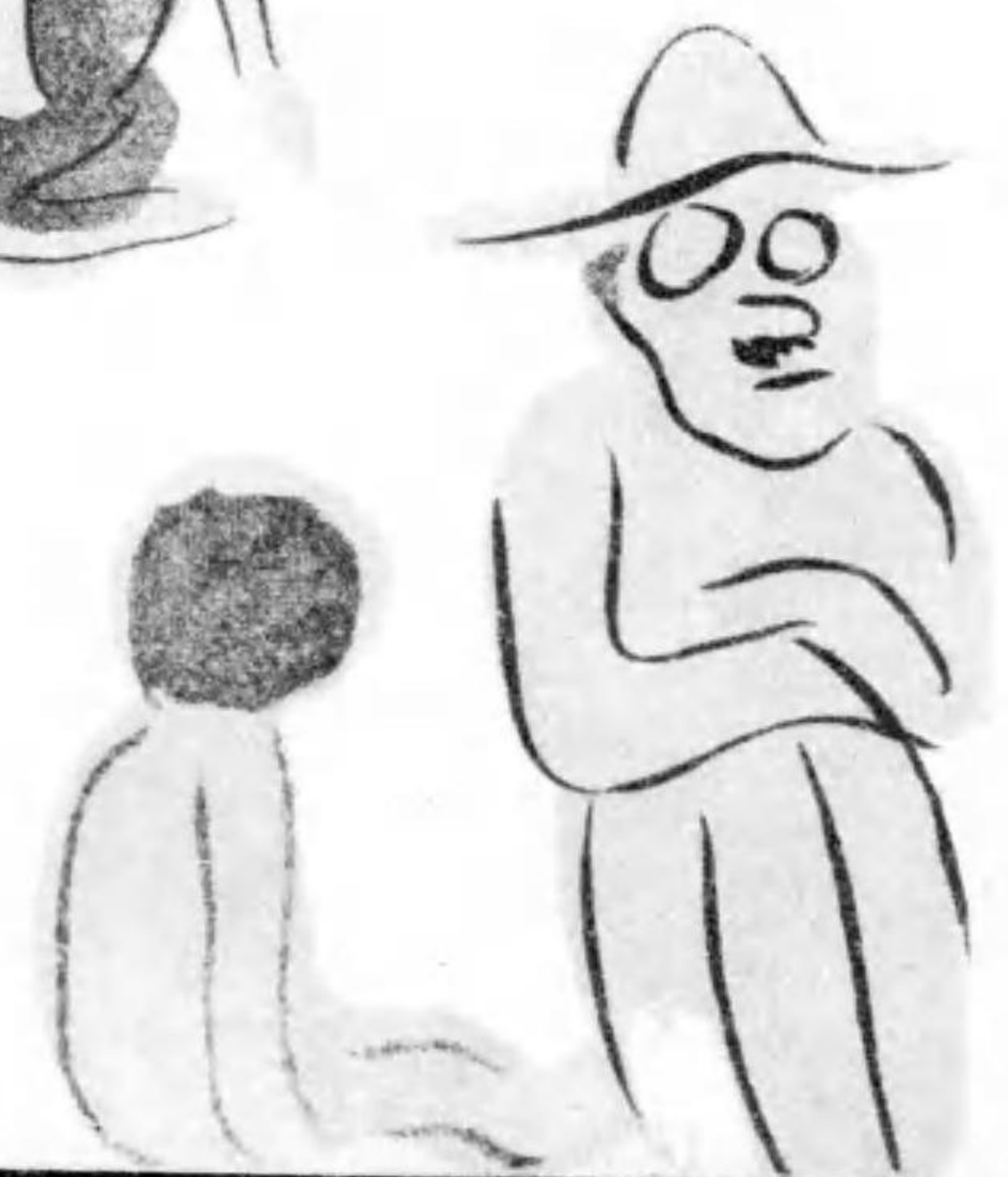


0<sup>m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>m</sup> 50 1 2 3 4 5

始









特106  
683



おもしろい旅



森  
暁  
紅  
著

大正  
11. 6. 8  
内交

博文館







はしがき

旅ほごおもしろいものはない。  
然し、實際私わたしのからだは、斯か様してかく道中記だうちうきの、んきな文字もじとはまるツきりアベコベな、自分じぶんながら柄がらにもないと思ふ程ほどの忙しい勤務くわんむにあるので、誘まよつたり誘まよはれたりして、オイソレと出掛でかけられる様な、なかくそんなわけぢやないのだ。  
土曜どようの夕ゆふから日曜にちようとか、もし夫れ日曜大祭にちようたいさいがつゞいてゐるとあれば、曆こよみを繰返くりかへして押頂おしただくゝらひなもので、此時このときなりと



息込むのだ。

であるから、支度して出掛る程の旅、長途の望みは些無理だが、然し其れでも、一晚越後に泊つて、次ぎの日は勤務の机に戻れるといふ様な旅を、當世の交通は容易にさせてくれもする。そこで、私等ですらそんなに忙がしいのであつてみれば、猶更世間の忙がしい中にゐる人々は、ヨリ忙がしいのは勿論、爲に好きな旅行も氣が重く大仰にのみ考へられて、折角の閑暇を、都會の埃りの横丁などに、圍ひの花を眺めて、窮屈な慰安を求めちまふといふ事になる。

變な、下直な文句を引合ひに出す様だが、一夜添ふても妻は妻といふ様な仇唄で濁つた慰安を求めらるならば、一夜泊りも旅

は旅と氣散じな替唄にした方が、どんなに平常の忙がしいからだの養ひになるか知れない。

出掛けてみれば、出掛すに考へてゐる程、氣の重いものでない、出れば直ぐ氣は軽くなること請合だ。

旅ほどおもしろいものはない。

茲に私は、私一流のほつき歩きから獲た所、一夜泊れば遠走りは勿論、よし日歸りでも小半日でも、十分觸れて來られる旅氣分のおもしろさをまとめ、かたぐ名所に傳はる物語も、汽車から覗く折柄の興と一二添へて案内とする。

まさか其物語りにだけはヨクを慎しまざるを得ないが、大方篇中に出る人物は、彌次喜多の昔を今に、凡そのんきの度を越



はしがき

四

してゐる所、さアそこがチヨイトでも都離れ、ば誰方も其様な  
るが旅の味と……そこでモウ一度いふ、  
旅ほどおもしろいものはない。

忙しい博文館の樓上にて  
旅の面白さを想ひ出つゝ

曉 紅いふ

### 目次

寫眞機赤倉温泉	松岸珍遊芳流閣	銀婚別所温泉	一行樂宵かかれ薬師	安一全稻毛の波	郊外葛飾名所
……………一	……………四	……………七	……………一二	……………一六	……………一九



名 隔 所 田 道 草 双 紙 ..... 二四三

の 鷺 旅 飛 だ 苦 る し み ..... 二九五

|| 物 語 ||

名 鏡 所 倉 朝 比 奈 切 通 し ..... 三一

名 筑 所 波 櫻 川 の 堰 ..... 三四七

— 畢 —

おもしろい旅

森 曉 紅 著

寫眞機 赤倉温泉

赤倉温泉

黒くなつて死ぬのをベストと言ひ、其れも鼠の相場を上げた流行ものなれば猫も旦那に買つて貰つて遠出の合財袋に疊込む程、近來流行出したものをベストといふ、光線恐るべしとはこれから始まつたと洒落の種板、暗室より生むが易しと、寫眞師が舌を巻ヒルムで、うつす方はひまになつたが現像の方が忙がしく、これを不思議な現像とは、どこまでも



洒落た世とはなつて來たり。

されば此作者が毎度道中記の種板にうつして、お馴染深い瓢箪者も、時代に負けぬ駈競べ、もしくカメラと洒落ながら、バスケットにベストの振分けをかつがせ、茲にお慰みを重ねるつもりだが、首尾よくゆかねばお惱ませ、つまり、讀者がヒルムといふものなり。さて出掛まするは例に依つて二人連れ、其名は龜郎に兎雄、行先は越後の赤倉、時は初夏の曇つた日の朝、何れ劣らぬ平常の寢呆助がめづらしい早起きに新鮮の空氣といふものを眼に泌みさせ、澁々した顔つきで、

「イヨーお早う。」

「遊びとなるとお互ひに起きて來る所が不思議だね。」

と上野驛の門口で、發車時刻によつほど早くちやんと會つたり。

「時に兎君、今度の旅行は君の體を少々拜借するから、其つもりで頼むよ。」

「何だい龜さん、のつけから氣味の悪い、東京も出ないのに、追剥ぎの白はなからうぜ。」

「追剥ぎとは何だい、君には此れが目に入らないのかい。」

と龜さん、斜めに肩へかけた鞆の紐を前へ廻して反つて見せる。

「オヤ變な物をかけて來たね、ハ、ア勘忍の袋を常に首にかけて洒落かい。」

「チョツ未だ目がハッキリしないのかい、袋ちやアない鞆だよ。」

「勘忍の鞆は新しい、勘忍の鞆を常に肩にかけなどはハイカラだね。」

「あれツ此鞆の型を見て解らない様ぢやア流行に遅れ過ぎてらア。」

「左様さ、流行にあんまりいゝものはないからね、綿蚊帳の様なガーゼの浴衣、猫入らずの自殺・病氣でコレラと來るだらう。」

「えッ嫌なものばかり並べらるぜ、焦れつたい、これはベストだよ。」

「フームン、コレラでなくツてベストかい。」

「ツ、忌々しい、當時流行の寫眞器械だよ。」

「あゝ左様か、ウム成程、イヤ感心。」



「オヤ亦妙に感心するぜ。」

「だつて君の寫眞器にベストはいゝ、つまり寫した奴を眞黒にして殺して了ふんだからね。」

「オイ、宜加減にして呉れよ、文句は手並を見てからいふ事だ。」

「其れで容姿のいゝ處をモデルにしようといふのか、イヤハヤ友達迷惑な道樂を始めたもんだ。」

「左様いふなツてば、旅行記念にはこれ程いゝ物はないからね。」

「左様さ、うまく寫ればね。」

「寫らないで何うする、唯今日は少し曇つてゐるので困つたよ。」

「と云つてマア逃げを張つて置くさアハ、ハ、ハ、ハ。」

相變らず、這處のが寄ると這處お喋舌がしつきりなし——折柄發車の鈴が鳴る。

ところてんを突く様に、旅客を一行に並べて改札口を順に繰出させる、これは上野驛の

氣働きで、紳士が眼の色を變へて女子供を押退けて行く様な、淺猿しいのがなくツていゝ。

「なア龜さん、此驛の建物は時代遅れで泥臭いが、此旅客の出し工合だけは氣にいつたね。」

「歩いてゆくエスカレーターといふものだね。」

順にノロノロ繰出されながらも、這處冗言を云はずにはゐられず、されば乗込んでからの喧さい事、茶屋で都々逸を唄つても税を取られる當節柄、口も此れ程に喋舌れるとあつ

ては、これも税の狙ひ所、乗合の向ふ三軒兩隣りを遠慮なく呆されさせる。

赤倉は越後の田口驛で降りて、登りが約二里、上野驛から田口驛まで、其哩程百五十八

哩、驛の數は四十一、時間は約八時間、汽車賃赤い切符で三圓廿九錢、青いので其倍、途

中名物は、熊谷の五家寶、磯部のカル、ス煎餅、熊の平の力餅、長野の杏羊羹、川は上州

の烏川、彼の川中島の戦繪巻を想出の信越の千曲、犀川、山は榛名、妙義、淺間、戸隠、

黒姫、飯綱、妙高——其妙高山の中腹にあるのが、只今二人の飄輕者が行かうといふ赤倉

の温泉!



朝からの曇り晴れさうで晴れず、切角龜さん自慢のベストを、窓から覗かせて伸したり縮めたり、漸つと雲切れの薄日を狙つて、

『しめく此光線ならうまさうだ、此あざやかな寫し方を見てゐたまへ。』

とファインダアを頻りと覗いてゐるうち、汽車は皮肉に失敬して、碓氷のトンネルへもぐり込む。

『チョツ』と龜さん痾癢の舌打をして、

『忌々しいツちやアない』と口惜しさうに云へば、

『だが何だね龜さん、寫眞を撮らうとするやとすると汽車が暗室へ入るなんざア通なものだね。』と兎君混ツ返して、さて亦曰く、

『天光線をむなしふする勿れ、時に半可の無きにしもあらずさ、アハ、ハ、ハ。』と龜さんヤケにベストを疊んで、

『何とでも云へよ』と萎氣ながら、首をひねつてこれ亦曰く、

『時に兎君斯様もあらうか、光線のうすむどころか闇々と、憎まれ口の輕井澤とは、』

『ひどくこぢつけたね。』

『何うもピントが脱れてゐるのさ。』

『兎角ピントに事なかれツてねアハ、ハ、ハ、ハ。』

『苦しい駄洒落の現像だウフ、ハ、ハ、ハ。』

子供遊びの蓮華の花、ひらいたりつぼめたり、凝始めの寫眞器械、矢鱈無性に撮りたくつて堪らず、出たり入つたり焦れつたく長い碓氷のトンネルを漸つと通り越たので、龜さん今度こそはと息込んだが、峠手前の雲切れは、此方へ來るとすつかり曇つてポツリくと大粒のお見舞、涼しい輕井澤は、雨の月見草に秋の感じ。

『オヤ、龜さん降出して來たね、雨の降る日は天氣が悪い、ベスト盡した甲斐がないあゝコラ、だ。』

『チョツ勝手にしやがれツ。』



「だが然し何だね龜さん、曇らうが雨が降らうが、御自慢のお手並で撮れないなどは心細いね、空ばかり気にしてハラ／＼してゐるなんざア縁日商人といふものだ。」  
 と兎君面白がつて亦こづく、が、何うこづかれても實は龜さん、タイムの度合もシポリ加減も一向呑込めてゐず、唯太陽に脊中を向けて日向を狙ひ、カメラを臍の見當に當てがつて屁放腰をするより外法を知らず、

「そりや撮れない事はないさ。」

口惜しがつていふものゝ、

「拙い、のをこしらへたくないからねえ。」

と苦しく逃げる。

「現像すると只モヤ／＼とした物ばかりなんざア見つともないからね。」

「え、ツわかツたよ／＼。」

と龜さん、實の所今まで幾度も其通り、黒いモヤ／＼と白いモヤ／＼ばかりを撮つてゐた

ので、其冷かしが身に沁る。

雲の歩き工合で、降つたり止んだり、雨も幸ひ本ものにはならず、川中島を通る時分は雲のちぎれに再び薄日、こゝなりと龜さんレンズを向けて、パチン。

「ねえ兎君、旅行家でカメラを持たないのは、藝妓が三味線を持たない様なものだよ。」  
 と、さも巧く撮れた顔で大納まり。

「ウフ、藝妓が三味線を持つて調子の合はないのと同じ事だつてね。」

「文句は出来上つた所を見てからにして貰ひたいね。」「あいよ／＼。」  
 やがて汽車は長野へ着く。

「漸つと長野だ、後もう二時間ばかりだね、君の寫眞熱にとりつかれたお蔭で、退屈はしなかつたが、然し随分長いなあ。」

「恰度此驛まで、半日かゝるね、争はれないものだ。」

「變に感心するぜ、此處まで、半日かゝるのが、何で争はれないものなんだ。」



『なかの半日つてね。』

『えつ止さねえか、寫真で惱ませなけりやア駄洒落と来る、あゝ助からない。』

『駄洒落ぢやア君の方が薬が強からうぜ。』

『へん僕のは駄ぢやアないよ、先刻の兎角ピントに事なかれなんざあ名洒落だね。』

『チョツピント迷惑といふものだ……時にもう一枚こゝらで撮らうかな。』

と、兎角龜さんカメラをひろげたがれば、

二

線路のところへ、潜つてゆく雪除の圍ひに、もう越後路へ入つたなと瓢輕者でも遠く来た旅の気分、

『何となく心細い感じがして来るからふしぎだね。』

『何と云つても都育立だからな。』

『都育立にしてはあんまり出来のいゝ方ぢやアないが、其れでも此雪除の圍ひなどを見ると、旅愁といふやつが沁るね。』

『左様さ、雪除なんざア東京ぢやア見られないからね。』

『然し東京でも自働車の泥除などを見ると心細くなるよ。』

『違えねえ——オツト柏原へ来た、龜さん此所が俳人一茶の墓のある所だよ。』

『通らしく云ひなさんな、驛の掲示は僕にだつて讀るよ、俳諧寺一茶の墓へ三丁だらう。』

『アハ、其の通りだ時に一茶の句にこんなのがあつたね「夏山やどこを目當の呼子鳥」ツてね、鳥度いゝ句ぢやアないか。』

『左様かね。』

『そこで何うだい、夏山やどこを目當の……ウフ、寫真取さ。』

『止せよモウ莫迦々々しい、喋舌つてゐると乗越すよ。此次きが田口だ、そろく支度を

二



爲様。

三

「イヤ其事だ、乗越苦勞などはしたくないや、愈々來たかい田口々々とたぐちの罌丸八疊敷かね。」

旅いろしもお

「おかしな洒落を云ふなよ。」

「其れぢやアやり直して、たぐちは損氣とは何うだい。」

「えううるさいッ。」

「叱りなさんな、洒落を褒ないとモデルになつてやらないぞ。」

支度しながら一ト喋舌の程もなく、漸つと田口驛に着く。

曇つた日の午後三時過ぎ、山裾の佗た小驛に降りた心持と、九時間足らずの乗くたびれ

は、流石の兩人妙に頭腦がポーツとした。

箱根は月並、鹽原那須も智恵がなし、と云つて會津の東山はお白粉の香がうつとしい、

といふ様なほんとうの温泉好きが、近年の目つけ所、殊に此頃評判になつて來た赤倉温泉

赤倉温泉

勿論二人は初めて行くのだが、然し評判を聞いての想像から、田口驛もさぞ繁昌、着けば赤倉行の自動車、二臺や三臺は待つておやうと期待したが、降りて見ると、寂しい小村の軒古りた停車場、共に降りた客も直ぐに散つて、驛前に退屈さうな俵が四五臺並んでゐるぎり、殊に降つたり止んだり路面は濡れて、驛の筋向ふにある温泉客の案内茶店も、店障子を閉たツきり。

僅かに降りた客の散つた後から、ポーツとした氣分で、兩人改札口を出ると、そこに尻

端折で腕まくりといふ、凄い感じのする婆さんがどこからか駈て來て、

「旦那方、妙高温泉かね、赤倉温泉かね、俵は何うですかい。」

と、其れが亦恐しく性急に、せり立る様に斯様いふので、兩人柄にもなく氣味の悪い顔を見合はせて目をパチクリ、

「うむ、く、俵かい、左様だね、僕等は赤倉へ行くのだが……ねえ兎君何うしやう。」

「さア……二里足らずあるツてんだから俵ぢやア焦れツたいね。」

二三



「自動車はないのかなあ。」

と云へば、婆さん其性急な調子で、

「自動車は未だ許可にならないでさア、俵は後押附きで一圓八十錢、乗ンなさるかね、乗ンなさらないかね。」

と彌々せり立てるが、兩人何うも其婆さんが、無氣味に感じられて、共にムズ／＼しちまひ、

「何うしよう龜さん。」

「うーむ。」

と唸つて、變な心持で遊つてゐる、と其婆さん性急だけに見切が早い、鳥度焦つたさうな顔すると、フイツと何處へか行つて了ふ。其れが殆ど忽然と消えてなくなつたかの様だ。

「オイ／＼兎君、何だらう彼の婆さんは、僕は何んだかゾツとしたよ。」

「變な物が現はれたものだね、茫然してゐると魔がさすといふが、事に依るとあれは人間ぢやアないかも知れないよ。」

「左様さ、戸隠山が近いから鬼女ぢやアあるまいか。」

「だが戸隠の鬼女なら紅葉狩で見たが、化てゐるうちは若くツて美しいぜ。」

「鬼女だつて今日まで生きてゐりやア、もう随分な年齢だ若くは化憎からう。」

「ウム解つた龜さん、ありや鬼女ぢやないよ。」

「はてね。」

「爺喰つたたぐち婆アだらうアハ、、、。」

「ウフツ何だい其れは。」

「通じが悪いな、たぬき婆アといふ洒落だよ。」

「註釋するから、好い氣なもんだアハ、、、時に兎君、洒落はいゝが自動車がないと心細いな、思ひの外開けてゐないんだね。」



『ウム左様なれば俾より爲方がない、其れとも奮發をして歩いて行かうか。』  
 『歩くのはあやまろう、歩く様に生れついてゐないんだから、どうも自動車に乗つけるといけないよ。』

『自動車がないと聞いたからつて吹きなさんな、といふものゝお互ひ様に近頃ムダに肥つたので、登りは閉口だな。』

實際此兩人、口ばかりは八丁だが、手は無器用に於て其半分にも及ばず、足と來ては見ることから間拔に太く、我が足ながら重たいのなり。

田口驛前で、暫時煮きらない相談をしたが、飛んで行ける智恵の出る筈もなく結局俵を呼んで乗る。

田口驛から左りへ六丁程の見晴しの丘に妙高温泉といふのがあり、其邊りにはお白粉臭いものもゐるとやらで寂しいこゝいらでの色彩になつてゐるらしいが、その湯は妙高中腹の赤倉からひいてゐるのだとの事だ。

赤倉道は、驛前を右へ少し行つて、其れから左りへくといふ様に、何丁といふ程もない田口の部落を出ぬけると、そこが昔時の加賀街道、左りへ八里で長野へ行く、右へ十里で直江津へ行く、其街道筋を、山添への木下蔭に夏鶯の聲を聴き、小川の橋にせゝらぎの音、うとくと眠むたく俵に揺れてゆく心持は、今朝、東京を立つたのが遠い昔の様な感じがして、兩人すつかり神経をたるませ、同じ様に欠伸ばかりしてゐる。

草家根の揃はぬ軒つゞきと、眞黒な裸の遊びツ兒が道端の流れでいたづらをしてゐる、稀々一人二人と拾ふ様にゆく旅の往來、そこが二俣といふ部落で、田口驛から恰度一里、其村端れから左りへ分れて稍急な登りになる、こゝで車夫は一息入れながら、其所の草の家へ聲をかけると、百姓片手間の後押人足、村の若いのが二人、菅の笠に糸立といふこしらへで、二人の俵の後につかまりながら、

『昨日ハア自動車の試運転をやつたで、道イひどくしちやつたよ。』

『此頃は雨ばつか降つてるから、ハア左様でなくも爲様ねえにの。』



と這麼言葉が、俣の前後で交されて、實際濡りきつた曳き憎さうな登りを、斜めに／＼に踏こたへてゆく。

二俣から五六丁雑木の繁みを通り越すと、眼界は夢の如に展けて、見る限りの草野原。折柄雲が亦低くなつて、ぼつり／＼とやつて来た。

「オヤ亦やつて来たぞ。」

「一か／＼りやるかの。」

「うんとしよ、そら亦泥濘ぞ。」

「よいこら。」

車夫等のあえぎと、ガツタリ／＼といふ車輪の音、卸した幌にパラ／＼と雨が打つ、やがて見てゆく草野の果に、雨霧が立ちこめて、其れが漸々深く四邊を圍んで来る。

「オイ／＼兎君心細くはないかい。」

と後の幌から聲をかければ、

「ウームン、何んだかこう人間界から離れてゆく様な心持がするね。」

と兎君前の幌の中から、籠つた聲で寂しさうに答へる。

雨霧に包まれた草野原、偶々ある森や木立が、霧の中に朦朧と、其れが恰かも巨人？

怪物？とでもいふ様に浮いてゐる。強くはないが雨はシト／＼と降りつゞく。

「ね、車夫衆、まるツきり往來が絶えてゐるんだね、それでも彼方へ行くと幾何か客が來

てゐるのかい。」

と龜さんが訊けば、

「へえ、まだハア幾何も登つてねえでさア。」

「思ひの外閑暇なんだね、これでも夏の盛りになれば込むのかね。」

「そりやハア込むでさア、まア此月末から來月一杯は宿屋は満員ですが。」

「平常は大抵こんな事かね。」

「これほどでもねえですが、此頃は天氣がよくねえでね。」



二〇  
車夫は息を切りく、やがてこんもりと樹立が込んで、迂曲してゆく道、とそこに、草の中に放り出した様な空別荘や、立派な門構への庭を見込みの誰れさんやらの別荘などが見えて来た、そこが赤倉！

三

温泉町と云へば、一方どこでも狭い道にゴタ／＼と湯宿の軒が連なつて、間々に名物お土産土産雜貨などの商ひ店が、一種の氣分を漂はしてゐるものだが、此所は全然、其様したありうちの氣分から離れて、暢然と廣い道中、家もまばらに數へる程、宿と云つては香雲館に香嶽樓、其二軒が都人士を迎へるに相應はしく、他に元祖とある高田屋、もう一軒村越屋といふのがあれど、其れはあまりに當世に遠く、行幕れた山路に求める昔の旅を想ひ出る侘びた氣分、といふ様な宿、其外には格別賣らうともしない様な、頼る閑とした商ひ店が、チラリホラリと見えるだけ、其れが赤倉の湯の町の全體だ。

其とツつきの右側、門から深く俵は入つて二人は香嶽樓の玄關に着く、こゝとても勿論オビヤカス様な建物ではないが、客室の數の多さと、ほしいまゝにした四邊の廣さ、殊にまだ避暑期に些早い静閑さは、二人がこれまでの旅日記に、嘗てない落着いた氣持、通された二階の部屋に、仲々と脚を伸ばしながら、

「ねえ龜さん、登つて来る氣分も、お互ひの今までの旅にはなかつたが、此宿の感じもまたたく俗氣を洗つちまふね。」

「實際仙郷といふ感じがするね、唯残念なのは天氣の悪い事だ。」

「だが其れだけ一層頭腦が落着くといふものぢやあないか。」

「そりやあ左様だが、折角此仙境に入りながら、カメラを疊んだつきりが情けない。」

「あゝ左様々々。」

「あゝ左様々々なんて、忘れてゐるのはひどからう、つき合のない男だ。」

「どつちにしたつて今日は最早日の暮れだ、あした天氣になあれとね。」



よく喋舌るので、女中等は来るたんびに面喰つてゐるが、其れだけ世間並の客に見えぬので、取扱ひに大事をとる氣味、兩人宜い氣になつて、折角山の閑寂を喋舌破ること也。病氣保養らしい女連れの長逗留と、他に二組ばかりといふ、廣い此樓に居るか居ないかわからぬ程の靜かさ、此二人が高調子で、風呂場へゆく騒々しさは、まつたく廊下中へ響きわたる。

雨は何うやら止んだらしいが、もう日の暮なれり、霧の深さに、風呂場の硝子窓からさぞかしと想はれる高原一帯の眺めも、唯薄らふたものゝ色に包まれゆくばかり。

廣い湯槽に仰向けに軀を浮かせて、襟首を縁に引懸た型で、足の爪をポチヤン／＼とやりながら、

『なあ此湯が東京へ湧いたらなあ。』

と龜さん、くだらない言をつく／＼と云へば、好い心持に顎まで浸つた兎君の答へがいゝ。

『此湯が東京へ湧きやア三越で温泉を始めらア。』  
と來た。

『三越で温泉はいゝ、兎君近來の傑作だ。』  
と、龜さん莫迦々々しくも感心の體。

廓ト傳ひながら別建物の廣々した風呂場、無色透明の炭酸泉、溢るゝにまかせ、まつたく二人の境といふべく、其調子高のお喋舌の間は、唯桶を落る湯の音ばかり、海拔實に二千五百尺とある、瞰下に雲湧く妙高山腹の夕べ、茲に三越を皮肉るの奇抜さ、東京見物の地方士が、三越のエレベーターにおつ魂消るのと、あべこべにして相通するの感、都會の文明と邊土の自然、彼れに馴れゝばこれに馴れゝば彼れを喜ぶ、茲に飄輕者のふざけた言葉のうちにも、知らず、人間生活のどんなものか窺はれるといふものだ。

『ところで泊りの相場は何ういふ程度にしやうね。』

『無論二等でせう。』



と、香嶽樓謹告の刷物にある、壹等金五圓也といふ所を奮發に及び、兎君はカラ下戸だが、龜さんは少々は飲む口とて、風呂から上つて晩酌の一本、鯉こくにフライといふ様な獻立で、

「ウム兎君、此山の上にしちやア思つたより喰へる味だね。」

「鯉つア妙高山たア何うだい。」

「きた始めたよアハ、鯉といふたと行かりよか佐渡へか……オム左様々々。」  
と龜さん氣が着いた様に、行儀よく控へた酌の女中に、

「ねえ姐さん、佐渡で想ひ出したが、此所から佐渡が見えると聞いたが、本當に見えるのかい」と訊けば、

「はア、晴れさへすれば此二階の窓からよく見えるのでございます。」

「フーム左様かい、そいつアさど好い景色だらうね。」

と眞面目に訊きながら洒落ちまふ、が女中は唯こくめいにうけて、

「好い景色ではございますけれども、年中かういふ所に住んで居ります私等には、別に好いとも思ひませんので。」

「ウムそりや左様かも知れない、年中見てゐちやアさど退屈だらう。」

と龜さん對手かまはず未だ駄洒落る、

「オイ、姐さん其人と眞面目に話をするのはおよしよ、悪い病があるんだから。」

と兎君が口を出せば、女中はどこまでも正直で、

「どこかお悪いのでございますか、此赤倉のお湯は大概な御病氣にはよろしいのでございます。」

といふ、兎君すつかり嬉しがつて、

「なあに其れがね、普通の病氣ぢやアないのさ、駄洒落病にベスト病と云つてね、人を見さへすれば變な言を云つたり、直きに體を借せなんていふんだ、尤も東京ぢやあ此頃大分流行つてゐるがね。」



と、これが亦眞顔でいへば、女中は不思議な顔をして、

『へえ——。』

とばかり、龜さんの顔を氣の毒さうに視詰たものだ。

『嫌だよ姐さん眞に受けて人の顔を見なさんなよ、オイ——兎君宜加減にしろツてば……姐さん病氣なんぞはないから安心をしよ。』

『アハ、龜さん言譯をする所が案外君も正直者だなアハ、、、、、。』

何れにしても其喋舌調子に面喰つてゐる女中は、其いふ言を唯そツと受けてゐるばかり。何がさて、越後國は中頸城郡、海拔五千五百尺とある山の上、むかし／＼の大昔、親鸞上人が發見に及んだ妙高山の靈泉、其湯を此中腹の赤倉に呼んで温泉場らしくなつたのはズーツと近い世の文化年間、山から瞰下す高田の藩主榊原の殿様が其當時のハイカラで、土地の繁榮策とあり別邸を此邊に設け、年々補助金を出して四面を潤はせたので、噂に残る其當時は湯宿料亭軒を並べ、お白粉の香、三味線の音、越後の粹士をあかあかとした山

の灯りに登らせたものだとある、其れはお大名の融通の利いた維新前までの話で、世が改革すると共に、お大名がお大名でもゐられねば補助金が止つて此山の灯もパツタリと消え以來舊の寂莫にかへつた。

斯様した大自然の境地にも盛衰の運命があるから面白い。一度太古にかへつた様な赤倉は、再び文明の交通が、改めて其靈泉と風光を世に廣くする事となり、さて再た今日こゝまでにこぎつけたものなのだ。

さて兩人、云ひたい言を云ひながら調理よりは氣分で味はせる宿の晩酌、宜しく済むで女中が膳をひいて退ると、此山の宿の主人にしては、髪に分工合も氣の利いたのが、お茶代の挨拶に入つて来る。

『先刻は有難う存じます、よくお出掛下さいました、當年は季候が遅れてをりますので、未だ静閑でございます、左様、當月末から來月は満員に相成ます、生憎今日は雨になりまして、明日は大抵晴れるでございますませう晴れますと此窓から、直江津高田を瞰下しまして



北日本海が見えます、へい佐渡もよく眺められます、左様季候は眞夏の盛りでございます、朝夕は浴衣だけではお寒いくらゐでございます、何うぞ御悠りと遊ばして……」

と云つた様な、訊かれさうな文句を一通り調子よく述べて引退る。主人ではまさか駄洒落や戯談もふつかげられず、おとなしく訊いてゐたからい。時は七月に入つてゐるのだが、湯上りを浴衣の上にとてらの重ね着、主人が引退ると兩人ごろりと寝そべつて、

「ねえ兎君、同じ宿屋に泊るんでもだね、主人が挨拶に来て引退つた後、女房でなくつて丸髷か何かに結つたのと二人ざりと云つたわりで、彼の女曰くさ、妾をほんとうのお神さんだと思つたか知ら……てな言でも云はれるんだとオツだがな。」

「オイ、〱、〱、〱、柄にない空想を並べるぜ、其夢でも見た事があるのかい、嫌だなあ俗物は……」

「俗物と云はれても、其方がいゝね。」

「あれ妙だなあ、季候が違ふので少し變になつたのぢやアないかい、まああした天氣が晴れたら佐渡でも眺めて俗氣を洗ふ事だよ。」

「それがね、佐渡を見たら金が欲しくなるだらうしね。」

「アハ、ハ、行届いた俗物だ、と、いふものゝ、其れが人間正直な所かね。」  
やがて女中が来て床をのべる、其間を亦風呂へ行つて一喋り。

## 四

窓の白み、小鳥の聲、どうやら今朝は晴れらしい。

「おい龜さん、〱、〱」

「う、うむ。」

「まだ睡てゐるのか。」

「睡てゐる者が返答をするか。」



『もう始めたよ……僕は何うも寢床が變ると眠れないんでね、さつきから目が覺てゐるのよ。』

『ウフ、何が寢床が變ると眠れないんだい、昨夜僕が話かけてゐるのにグー／＼鼻をかいてゐたぜ。』

『イヤ昨夜は流石に疲れてゐたからね。』

『何を云つてゐるんだい、そんなら何も寢床が變つたつて變らなかつて、同じやアないか。』

『い、えい、朝早く目が覺て困るつてことさ。』

『朝早く目が覺るのは寢床の故ぢやアないよ、今日は働くといふ用がないからだよ、僕だつて先刻から覺てゐるのだ、遊ぶとなると起されなくて目が覺る様に出來てゐるのだ、そこがやつぱり人間の正直な所さ。』

『正直の頭に神宿るか、神も感應さしく／＼今朝は天氣らしいよ。』

『メたぞ、天氣なら一番腕を揮ふぞ。』

『何だい急に飛起きてさ、頓狂な男だな。』

『何だいたア氣がないぜ、ベストに取懸るんだ。』

『あゝ左様々々、君は飛だ厄介物を持つて來たんだつけなあ。』

『厄介物たア何だ、これあるが爲に斯る邊土の景色風俗を懐ろにして歸られるのだ。』

『折角だが大將、繪葉書を買つて行つた方がよかアないかね。』

『繪葉書ぢやア此方の好む所ばかりはないからね。』

『好む所を撮つて歸つて、見ると唯眞黒になつてゐるなんざアいゝからな、赤倉の闇の景色と來るだらうウフフ、ハ、ハ。』

『えツやかましい床の中から文句を云ひなさんな。』

と龜さん靴からカメラを出すと、懐中へ入れて起上り、窓の戸をガタ／＼とあけて外を眺め、



「う、む、こりやア好い、なある程好い所だ、オイ／＼兎君起きて見ろよ、實に何とも云へない景色だ、まつたく雄大だなア。」  
と絶叫してゐる。

窓は西北に面してゐる、首を出して左りへ見上げるそこは妙高の峰つゞき、右手の彼方に米山が薄墨に聳え見下す一帯其れは越後平野で、きのふは霧に包まれてゐたが、今朝は左右の山の頂きを去來する名残の雲のみに快晴とはゆかぬが曉の大氣に展けて、高原より平野へなだらかに蒼々と澄わたる、其平野の盡きる所即ち北日本海だ、其水平線上に淡い一刷毛の墨色が望まれる。

「ウム彼れが佐渡だな。」

「ナニ佐渡が見えるかい。」

と兎君もノコ／＼起き出し、共に窓から首を並べて、

「佐渡はどこだチュウ／＼。」

と駄洒落ながら眼を擦る。

「そら此見當だ、白く海が見えるだらう、あれがたしかに直江津の海岸だ、あの海の少し左りへ寄つた所に薄墨色に見えるだらう、彼れが佐渡に違ない。」

「ウム成程左様らしい、さどやさど／＼さどやさどかね。」

「喧さく駄洒落ばかりいふぜ、君の様な人間に遇つちやア、景色も何もめちや／＼だね。」

「だつて何も景色を見たつて悪く納つたり片附る事もなからう、自然好い心持になるから洒落も出て来るんだよ、變に首をひねつて一句やると來たら猶困るだらう、其れともきかせ様か、赤倉やあゝ赤倉や／＼とね。」

「お止しよ莫迦だなあ。」

「だがあんまり景色が好いと、蕉翁様でも這麼言を云ひます……オヤ／＼彼方の山の方からウネ／＼と雲が湧いて來たぜ、えゝ龜さん事によると今日も亦雨になるかも知れないよ。」



「えッ折角晴かゝつてゐるのにケチをつけなさんな。」

「然し僕がケチをつけた位で雨になれば、僕も凡人ぢやアないね、オウ／＼山の太氣といふものは不思議な程だな、見る見るうちに雲が取巻いて来たぜ、面白い／＼。」

「何が面白い奴があるものか、喋舌つてる間に二三枚撮つて来様……え、オイ兎君嫌に逆らはないで一緒においでよ。」

撮るもいゝが起きる直ぐは忙しないぜ、一風呂入つてからにして頂かう、温泉へ来て左様コキ使はれちやア堪らないや。」

「チョツ云ふ言が嫌だなア、コキ使はれるたア何だい……愚圖々々してゐて亦降られりやア撮り損ねるからさ。」

「其うちに降つて来れば、此方は面倒臭くなつていゝからな。」

「君は折角こゝまで来て、此景色の中の人となりたくないのかい。」

「景色の中に眞黒になつてポーと立つてゐるなんざア有難くないからね……然しまあ／＼」

坊ちやんの御機嫌を損じない様に、爲方がないそこらまで出てやらう。」

と、兎君文句はいふが、其れも當世の旅の一興、活動俳優に買はれた氣で、

「え、オイ撮影技師巧く頼むぜ。」

と、宜しく玄關から外へ出やうとすると、今折角佐渡を望かした晴れ模様は、意地悪くも雲がはびこつて、やつぱり今日も日和癖の、ぼつり／＼と降つて来た。

「オヤ不可ない、龜さん亦お出なすつたぜ。」

と、流石そこは友人甲斐で、兎君氣の毒さうに云へば、

「チョツ癪だなア、然し未だ曇り切つてゐないし、此位の光線なら大丈夫かも知れない兎に角そこいらへ出て撮らう。」

「ヤレ／＼熱心なこつてす。だが出掛るなら傘を借やうぜ。」

と、やがて香嶽樓と書いた番傘を肩に、貸下駄を突かけて、其門を出て左リヘダラ／＼下りの見晴らし、草野の露に兎君を立てせて、六尺退つて龜さんレンズを向け、



「君動いちやア不可ないよ。」

とフアインダアを覗きながら、

「却々面白い構圖だから。」

など、利いた風な言をいふ。

「ウフ構圖魔多しといふぜ、さつさと頼むよ。」

「駄つて〜。」

「喋古つたつて聲が寫るわけぢやなからう。」

「口が動くよ。」

「人間口が動かなくなりやアおしまひだ。」

「あれツ……ぢやア仕様がない、傘をかついで彼方を回してくれ。」

「白浪五人男の型と來たな、オツト斯様かね。」

と兎君、傘をかついで見得を切る、背後からパチン。

「もういゝよ。」

と龜さんが云へば、兎君未だ彼方を向いた儘で、

「其方はよくつても此方が不可ない。」

と動かない。

「何をしてゐるのだい。」と云へば、

「小便をしてゐるのだよ。」

五

ふり仰ぐ山、瞰下す廣野、見るく雲來たり、亦去り、降り降らずみ、さまざまに風光を變へる大氣の動きと。此境地の靜寂さに、しつとりとした氣持になつて、寢起きの一巡りから戻つて風呂に飛込んだ兩人、たぶくとあふれこぼれる湯に、こびりついてゐる俗氣が流れ去つて、駄洒落のゼンマイもすつかりゆるんだ。



「實際生きのびるね。」

と、兎君うつとりと云へば、

「まったくだねアア。」

と龜さん欠伸をする。

「正直な話さ、平常アクセク働いてゐるんだからね、時々斯様いふ所へ来て頭腦のクリ

ーニングをしないと不可ないね。」

「ほんとうだ、兎君、同じ氣保養をするんでも四疊半の一泊會なんざア悪なものだから

ね。」

など、随分したらしい左様した遊びなどが、柄にもなく淺猿しく顧みられる様な顔つ

きをしていふ。

「然しね龜さん人間彼れを保養にする時代が花かも知れないぜ。」

「心細い事を云ふなよ、話が沁りして來ると少し愚痴氣味になるね、まだ、時代を通り

越たわけぢやアないぜ、お互ひに悟りの早い僥倖さ、悪とは云ひながら、其方の保養だつて誘やア君だつてまんざら迷惑がる方でもなからう。」

「左様さ、融通は利く方だね……だが何しても此頃の遊びを考へると、旅行は安いね。」

「遊興税か通行税か、どつちみち冗費のうちからも何かの足しになる税金を拂ふんだが、

遊興税なんざア色氣がないからね、まったく遊びがオツでなくなつたよ、其れよりは斯様

して、寫眞器でも持つて好きな景色を撮つたり、自然の湯に浸つてゐる方が、どんなにい

いか知れないや。」

「何の彼のと遂々亦寫眞の所へ持つて來たぜ……其れはいゝが、今日は何ういふ事にする

んだい、急ぐ旅ぢやアないが日の無い旅だ、晴れ間を狙つてベストを盡しながら此所にも

う一晚泊つて明朝早立ちとでもするかい。」

「左様さなア、好い所だが要するにこれだけの所だから、何うせ今夜泊るなら外の土地へ

行つて氣分を變へた方がいゝね。」



「と云つて此上遠ッ走りは歸途がたへるから、戻りの線の内にしやうぜ。」

「左様なると信州路だね、後生氣を出して善光寺へ廻らうか。」

「聊か智慧はないが、此所で閑寂を味つて彼所で線香の香を嗅ぐのも、頭腦を静かにしていゝかも知れない。」

「左様なると少し悟りが過ぎて来たやうだぜ。」

「過ぎると元に復つて權堂邊りで、旅先の四疊半を味ふ氣になりやしないかね。」

「アハ、其邊は請合はれない、何しろ蟬通が利クンだから。」

「兎に角今日は善光寺詣りと出掛やう、お互ひに長野は會遊の土地だ、善光寺様だつてオヤよく寄つてお呉れだ位いな言をいふだらう。」

「然し何だぜ此前に行つた時には、其有名な權堂といふ町を見落したからね。」

「ヤイ／＼そろ／＼悟りがもどつて来た様だな。」

朝の湯槽に悠りと這座相談、上つてやがて、おとなしい女中からかひながら朝飯が濟

かと、いつか亦雲切れがしてほつかりと、陽がさして来た。

「イヨウ龜さん陽がさして来た、今度はほんとうに晴れるかも知れないよ。」

「左様だね、これもやつぱり善光寺へ詣らうといふ後生氣を出した御蔭だね。」

「其れをかこつけて權堂の如來の方へ信心する氣になると今度は土砂降を食ふといふものだ。」

「尤も權堂へ引取られるなら土砂降だつて介はない、信濃戀路はさて果敢なさよ、權堂逢

ふのが命がけツてねハア、ハ、ハ、ハ。」

「悪い替唄だウフ、ハ、ハ、ハ。」

「オホ、ハ、ハ、ハ。」

おとなしい女中もをかしがつて、昨日から今朝への最早お馴染だけに笑ひながら、

「權堂には却々綺麗な藝妓さんがゐるさうですね。」といふ。

「オヤ／＼いらまでも評判かい。」



『こりや彌々行かずんばあるべからず。』

と兩人忽ち今の前の清遊氣分、斯様いふ所で頭腦をクリ！ニングするなど、湯槽で納まつた言ひ甲斐もなく、俗氣満々と乗出したもの。

『よく長野から此方へ巡つていらつしやるお客様のお噂に出ますのでございます、ほんとうに旦那方同志の御旅行は何方も其慶言を仰有つてございませよオホ、。』

など云ひながら、女中は飯櫃の上へ給仕の盆を乗せて引退る。

『して見ると、旅へ出ると誰れでも似たものなんだね。』

『そんなら僕等も世間並なんだね龜さん、何も清遊ばかりでがまんしてゐる事もあるま』

『遠えねえ……そりやアいゝが行くとしたら何時頃に立つか決め様ぜ、どつちみち田口から長野までは僅かの丁場なんだから晝飯でも喰つてからのお立ちで宜からう。』

『そこで、折角陽が當つて来たから其間にモウ一ツベストを働かせ様といふのだらう。』

『其通りだ。』

『アハ、いゝ氣なもんだ、そんなら龜さん云はれないうちに出掛てやらう、撮るだけ撮る。』

『感心を。』

今度は大丈夫、妙高の頂上も雲からのぞいて、草野の露に淡い陽ざしがしんみりと、何とも云へない高原の初夏の朝風、どてらの着心が重くない程——どこかで鶯が鳴いてゐる。

雪除の庇を出した古りた柱の板葺、茅葺、其様した軒の煤けた家が、廣い山路の兩側にまばらに並んで、一二丁、其道の真中に寄木造りともいふ様な、格子で圍つた四角な建物、其れは此街の共同風呂で、覗けばモヤリとした湯の香の中に、赤銅色の裸が三四人屈托の無さうな高調子でワヤ／＼と話聲。

其街、三丁程爪先上りの突當りに、赤倉遊園地とある大きな標杭が建つてゐる、造らず



其儘木の柵草叢自然にまかせて、薬師如來の古りた堂宇をあしらひに、色の褪せた奉納提灯が草の背伸びからのぞいてゐる。

「え、オイ龜さん、そこらの繁みを分けて熊の皮の胴服を着たのでもヌツと出さうだね。」

「さしづめ僕等が、六部に武者修行といふ役所か、自然の大道具は有難いね。」

「然し遊園地としちやア手を着けな過ぎたものだが、何れプランコにオスベリなんどが出来るんだらう。」

「甘い事を云ひな、んな、赤倉の發展と共にモウ四五年も経つと、ビールの空瓶を並べたお白粉臭い店が出来るかも知れないよ。」

「左様なつて来ると、昔馴染の女に出つこはすやつだらう。」

「止さねえか、安い道樂者に見なさんな、オツトお喋舌よりはこゝも一ツパチンとやらうぜ。」

と龜さん、頻りとそこら中でパチンく、空は何うやら晴れたが、光線の日當違ひは現像

したら何が出るやら兎も角もヒルム一卷撮り終つて、宿に戻れば程もなく中食の支度、其間に鳥渡又一風呂。

「別れの湯に入らう。」

「別れの湯と云やアつまり湯灌だね、ウフ湯灌をつかつて善光寺へ行きやア世話ア無いや。」

「生れ變つて東京へ歸るやつだ。」

「權堂の極樂で娑婆へ出るのが嫌になりなさんなよ。」

「そりや何とも知れない。」

兎角此日は權堂が問題!

折柄此樓へ新來の客が恰度二人乗つて来た俾のかへりを倅ひと頼んで、赤倉を正午頃立つて下りは早く田口驛まで約一時間、きのふ曇りの景色を、けふは晴れの風趣を變へて、龜さんモウ一卷ヒルムを仕込んだカメラを俾の上からパチンく。



やがて田口驛へ着いたが上りの汽車には未だ三十分早いとあり、きのふ来た時不景氣に障子の閉てあつた驛前の茶見世が開いてゐるので、一休みと入れれば、

「オイ旦那方、只今お歸りでございますか。」

と急々と現はれたのが、きのふ着いた時オビヤカされた彼の婆さん、又ギョツとした様に兩人顔を見合はせたが何の事其婆さんは茶見世の主で、驛に着く客を見るときは稼業柄で世話を焼く、其れがその氣の短かい性分、今そこに居たかと思へばいつか見えなくなつちまつたり、つまりチヨコマカした婆さんといふだけの話なり。

「何だい此店の婆さんなのか。」

「そんなら別に不思議はないや。」

「然し、きのふの陰氣な空工合と、初めて降りた此驛で、突然現はれた婆さんのセリ立てる様なのにオビエないぢやアゐられなかつたよ。」

「ほんとにさ。」

など云つてゐる所へ、婆さん亦急々と現はれて、

「旦那方切符を買つて来ませうかね。」

と忙がしい、其れが性分、息をせき／＼切符を買つて来るかと思へば、一寸何處かへ行つて、亦現はれ、

「さア／＼旦那方、上りが見えます、お荷物は無いですか、洋傘アお出しなさい持つて行きてませう。」

と来た。此婆さんきつと田口の名物だらう！

やがて上りの着くが早い、か兩人は婆さんに追はれる様に乘込んで長野へこそは向つたが善光寺の御利益、權堂の情調は何うだツたか、作者遂にそこまでは訊かず。(をばり)



名物 松岸 珍遊芳流閣

「東京を離れちやア飯食物の注文は無理だが、どこへ行つたつて女の子のゐない所はなからう。」

と、青吉といふ若いのがいふ。

「へつ二言目には女の子と来る。僕なんざア、偶には女の子のゐない國へ行つて、伸び伸びと寝て見たいくらゐなものだ。」

と、壯六といふ中年のがいふ。

「何うも君達は、旅行の相談をするのに景色の事を言はないのだからおそろしい、ちと古

蹟でも探る氣になつて貰ひたいものだテ。」

と、金兵衛といふ初老年齡のがいふ。

「ウフ、。」

と青吉は笑つて、

「東京ぢやア年齢の手前氣がすすつてんで旅へ出ると若い者を押退けて脱線に及ぶのは誰だツけね、えゝをぢさん。」

と襟つたさうに云へば、壯六も其れについて、

「アハ、まつたくだ、旅へ出たらをぢさんと呼んでくれるななんて、いつもいふからね、あんまり分別さうな事は云はないことサ。」

と云へば、金兵衛ニヤリとしながら、

「これさ、相談のうちから底を割りなさんなよ、何も壯公君だつて、女のゐない國へ行つて伸びくと寝たいなどと云ひツこなした。宿へ着くと直ぐ、女中にエスとビーの詮議を



吾

するのは誰だい。

「あれは民情視察といふものサ、土地の情況は花柳界の盛衰に依つてわかるものだからね。」

「ウフ、何の彼のと壯さんもをぢさんも、兜を脱いで相談をしたらどうだい、どつちにしたつて、景色も蜂の天窓もあつたものぢやアない、詩だの歌だのは餘所の畑で作るものだ。文句よりはサツサと行先を決めてお貰ひ申したい。」

と青吉は若いだけにせがむ。

「イヤ其事だ、どこにしやうね、をぢさん。」

「オイ、壯的、どうも其の……言葉尻へをぢさんは耳障りだな。」

「アハ、そろ／＼封じ始めたぜ、言はねえ事か……とムつて金ちやんとも呼び憎いなア青さん。」

「左様さ、金兵衛さんぢやア高利貸の様だし、唯金さんぢやア貨本屋の様だし、ハテ何と

呼んだものか。」

「焦れツてえ、金兄さんと云ひなよ。」

「フ、青さん聞いたかい金兄さんだとサ。」

「哀れやをぢさん、左様云はれた時代が戀しいのだらう、だが何だね、呼ぶ方で氣がさすなア。」

「呼ぶ方で氣がさすなんざア餘計な心配といふものだ、人間左様呼べば左様見えるものだよ。」

「さうかなア、何うだらう壯さん、左様呼べば左様見えるかね。」

「ウーム惜しい事に少し天窓の毛が薄くなつて來たな。」

「えツ天窓の世話までやきなさんな、ナポレオンは二十六で天窓が禿たといふぜ。」

「アハ、變な所へナポレオンを引張出したもんだ……尤もをぢさんも戦人には違ひなしかアハ、まア然しをぢさんでも兄さんでも其處ことは何うでもいゝが、宜い加減に行



先を決め様ツて事さ。』

と青吉は焦れツたがる。

青年、中年、初老、早齢にして五ツ六ツづつ違ふのだが、友達となつて見れば、心持か

一ツになつて、三人の年齢を合計して三で割つたノホ、ン均一、野暮な家内や、喧さい世間から體を交し、斯様して落合つて旅の相談。

『イザとなると相變らず詮議に悩むやつだが、考へさせれば矢張それがし幾日かの長あり……と云つては年齢が知れるが、鳥渡君達の氣付かない頗るオツな土地があります。』と金兵衛フト思ひついた顔で得意さうに云へば、

『ハテネ、をぢさんのオツな土地ぢやア時々酷い目に遇はせられるからなア壯さん。』

『まつたくだ、いつかの例幣地街道のイ戰場なども驚いたからな、枋への町端れて提灯を買つて田圃をまごつきの、狐に化かさの型なんざア心細かつたからね。』

『アハ、左様々々、彼の時ア少し萎氣たツけな。ところが今度の思ひつきは、きつと君

達の喝采を博します。』

『兎角能書は素晴らしいが、行つて見ればなアんだといふ所だらう、で、その何處なのだ

So!

『折角の思ひつきを貶しながら聞くんだから禮儀を知らな過ぎる。些と慎しむで聴きなよ、然も此れは僕が會遊の地だから案内も確かなものだ、思ひ出せばお、それよ嘗て其地に遊んだ折、後を約した女もあつたが……。』

『オイ、をぢさんが變な調子になつて来たよ、青さん氣を確乎持つてくれ。』

『ウームンドつちが禮儀を知らないんだか解らなくなつて来たね……第一名所舊蹟でも探りなつてえをぢさんが、案内の發端に女の車を出してゐるなんざア呆れたものだ。』

『イヤ失敬、ツイ人情で思出したが、今は昔時の語り草さ。』

『ウフ、十六年以前夜も長月、二十六夜の月待の夜と来たかい、左様云へば成程をぢさんは若い時分には東若丸と言つた様な顔をしてゐるね、壯さん。』



『生長して蔭辨慶となつたやつだね。』

『なるほど其れでをぢさんよくホラを吹くんだな。』

『再び尋ね逢はんと思ひ、國を出て十六年さまよひ尋ねる憂難が思ひやられるといふものだ。』

『え、喧ましい輩だ。人を捏返して俄をやりなさんな。』

二

『イヤ冗戯は冗戯として、折角の思ひつきだ、慎んで承まはらう、何れにしても女の子に縁のありさうな所だから頼母しろ。』

と青吉が膝を進めれば、

『恥しはするが、實の所は、世の中はお色氣で持つたものでげすと寄席學校で教はつたものだ、鐘がゴーンと鳴る、其のんの字がお色氣といふもので、此のんの字を取つて御覽な

さい、唯ゴゴゴ。』

と壯六も、其行先を聞かうとするのだが、ヨタ慣れの喋舌癖で、氣では黙らうとしても口の方が止まらない。

『えッ宜い加減に蛇口のネジを止めないか、水道だと罰金を取られるぜ、マア何てえお喋舌だらう。』

『然し蛇口は酷からう。』

と壯六思はず口をトンがらかせば、青吉が其の横顔を覗いて、

『成程、蛇口とは旨く云つた。』  
と感心する。

『チョツ青公つまらない事を感じしやアがる。』

『オツト壯さん怒つた様な顔をするに猶似て来る、其れで首からバケツをブラ下がりやアお長家の共用栓といふものだアハ、ハ、ハ。』



「ヤイ〜黙つてありやア宜い氣になつて何うするか見ろツ。」  
 「愈々水道破裂と来たな、修繕中斷水といふ所で、少し黙つてお聞きよ。」  
 と金兵衛も亦混返しながら、冗戯の喧嘩腰を折つて、  
 「さて其思つきの土地といふのはね、利根の水閣、俗に芳流閣といふのさ、何と君達は知らなかつたらう。」

「へえ〜こりやア知らなかつた、ねえ壯さん……。」

「ウム芳流閣などは奇想天外といふものだね、南總里見八犬傳第四輯卷の一、信乃と現八屋上の大立廻りの彼れだらう。」

「其れさ、馬琴の本文でゆくと許我とあるから即ち古河なのだらうが、同じ大利根の水邊で銚子口なのだから、亦因縁なきにしもふさといふわけさ。」

「フーム銚子口に其處所があるのかい、然し八犬傳とは案内が堅くなつて来たね、少しお色氣に遠去かりはしないかえ。」

と青吉鳥渡つまらなさうな内をすれば、金兵衛ニヤ〜としながら、

「ところが左にあらすだからオツだといふのさ、お堅い馬琴の芳流閣を、巫山戯た三馬の潮來婦誌で行かうといふ所なのだ、大河滔々たる坂東太郎の流れの末、上り下りの船から望めば、樓閣の薨が水に臨んで、時に高欄から化粧の水を溢さうといふ情景ありさ、船から望んで芳流閣とは見立るが、芳は阿呆の呆に通じ、流は花柳の柳に通ず、氣取つて曰く誰れを松岸といふ所だ。」

「何、松岸……聞いた様な名だな、なア青の字。」

「聞いた様な筈だ、銚子驛の手前にあつた驛だろ、いつかソラ君と二人で行つた時に通つたおやないか、何だ彼の松岸かいをぢさん。」

「左様よ、だから銚子口だと云つてゐるぢやアないか、然し左様いふオツな土地とも知らずは無神經に通り過ぎちやつたのだらう、銚子へ行つて松岸情調を知らねえなんざアト、ンにしてチキなるものだ。」



『オヤ變な事をいふね、其トンにしてチキなるものツてのは何だい……壯さん君知つてるかい。』

『ウンニヤ。』

『やれ〜どこまで通じが悪いんだらう、よしか、トンにしてチキだからトンチキといふ事だ。』

『ウム成程トンチキか。』

『オイ〜青的、何が成程だい、トンチキまで言はれて感心してゐるやつがあるかい……其れぢやア訊くがねをぢさん、そも〜其のトンチキといふ詞の意味は何ういふんだか序に教へて頂きたいね。』

と壯六口惜しがつて皮肉に訊けば、金兵衛鼻を一つフンとやつて、

『ハテサテ漸々つき合つて見ると、通人の鍍金が剝けて來るな、成程トンチキの語源を知らねえ様ぢやア、芳流閣を知らずに素通りをする筈だ、其れで銚子へ行つて燈臺下暗しか

アハハ、ハハ。』

『壯さん〜確固しておくれよ、おぢさんの鼻息が銚子の浪より恐しいぜ、其れで例のヨタを飛ばされりやア世話アないや、昔時唐土にトンといふ國があつて其所にチキといふ人がゐた……てなわけだらう。』

『違えねえ、苦るしくなると唐土をかつぎ出すやつか、をぢさん唐土は封じやうぜ。』

『何を言やアがる、縁日の團子屋ぢやアあるまいし、もろこしばかり捏やアしねえよ、知らなきやア神妙にして聴くものだ、よしか、そも此のトンチキと云ふのは、ヤケな言葉の「飛んだ畜生だ。」といふのを、詰めてトンチキと云つたものさ、通人振るなら此の位事は心得て置きなよ。』

『チョツ事由を訊けばくだらないが、だが然し「飛んだ畜生」を詰めたのなら、トンチキぢやないトンチクだらうぜ、なア青さん。』

『まつたくだ、其の邊は何うなんだいをぢさん。』



「えッ情けねえ、そこが江戸訛りといふものだ。」

「フーム、すると何だね、江戸訛りでいふと貯蓄銀行なんざア。貯チキ銀行といふんだねアハ、ハ、ハ。」

と壯六が云へば、青吉は嬉しがつて、

「アハ、妙々。」

と大喝采。

「忌えましい、眼の色を變へて揚足を取るんだからやりきれない……親類會議が纏らな過ぎらア、一體松岸案は何ろするんだよ、行くのか行かないのか。」

と金兵衛が云へば、結局は仲よしの文句はなく、

「銚子に乗つて行くよ〜。」

## 三

仲よしが三人寄つた其れは春の夜、駄洒落と揚足で捏返した相談の結局が一夜芳流閣に利根の水を濁して、次ぎの日を銚子の浪に洗はると決まり、行くとなつては其夜の月が傘さしてゐやうが、日和なんぞを氣にしてはゐられず、よし雨が降らうが槍が降らうが、萬障蹴飛ばして其翌日の午後、兩國驛へ落合ふ約束!

好い鹽梅に槍は降らなかつたが、朝の花曇りが空頼みになつて、三日見ぬ間の櫻花がお蔭でめちやくといふ、春雨の絲の様なのが、漸次に細引の様に太くなり、然もおせつかいに風まで手傳つて、ドンヤ降り横なぐりと來たが、何これしきと疊んだ洋傘の雫を揃ひながら、兩國驛の石段を駆け上つて、壯六キヨロ〜と待合室を覗き込めば、ステーションといふ商賣雨にもめげず、ゴタ〜と繁昌の隅ツこから、

「オイ壯的此方だよ〜。」

と金兵衛が待ちくたびれた顔で呼んでゐる。

「イヨウをぢさんモウ來てゐたのか。」



と壯六駈け寄つて、

「青公は未だ見えないかね。」

と訊けば、

「青公は一番がけに来てゐるんだ。今鳥渡小便に行つてるよ、先刻から君の遅いのを焦れツたがつてゐたのさ。」

「何も僕が来たからツて直ぐ汽車が出るわけでもなからう、時間も来ないのに早くから来てゐるなんざアトンにしてチキたるものだ。」

と寄れば直ぐへらず口が始まる、ところへ青吉も便所から戻つて、

「何だい壯さん遅いぢやアないか、随分待つたぜ飛んだ畜生だ。」

と、昨夜の相談から持越しのトンチキを流行らせてゐるうちに、程なく午後三時、銚子行き發車。

東京地圖の朱引外へ四手に分かれた線路の中でも、一番泥臭い氣分のする、ダンベエ言

葉の込合ひ、麥粉一袋の手土産で東京の親類へ泊りに行つたといふ様な婆さまが、間違つて二等室へ飛込んで澄まし込んでゐるなどは、稀らしくもないとある。

折角三人、迎もは遊山旅と氣前を見せて青切符と奢つたものゝ、東海線の三等氣分、殊に此のドンシャ降りとあつては、恁麼粹狂な遊山らしい客はなく、乗合客は何れも野暮堅い顔つきばかり、米が安い肥料が何うだのと、のんきな三人には耳障りだが、亦此方ののんきな喋舌も外の客の耳障りだ。

櫻花の江戸川も、桃の市川も、吹き降りの車窓に覗く張合もなく——尤も景色を覗く風流よりも、壯六の袂から取出したウキスキーの口を廻し小人島のバケツの様な洋盆に注いで、

「何うだいをちさんに青ちゃん、道中お慰みを重ねて、驛々の名を洒落飲みとやらう。」

と、さなきだに喧さい上を、さらにお慰みを重ねるなどは思ひやられる次第なり。



と金兵衛が云へば、

『まったくだ、僕なんざア、先刻から好い洒落を嗜みころしてゐるんだ。』  
と青吉がいふ。

『ちやア斯様しやう、今まで過ぎて来た所で一ツづつ用ゐやう。』

『よし心得た、先刻小岩で仕入れてあるんだ小岩忠案の外とは何うだい。』

と青吉、先手を打たれない様にあわて、云へば、

『少し調子が古いね、先づ僕のを一ツ聞かせよつ、いゝかえ、市川驛で一ツ、いちかはめぐり逢ふ坂のと。』

とをぢさんあやしげな節をつけて大納まり、壯六噴笑して、

『ウフ、あんまり其れも新しい調子ぢやアないぜ、いちかはをいつかはに利かせるなんざア、ちく生をちき生といふやつだアハ、ハ、ハ、ハ。』

『えつまだ昨夜のトンチキが祟つてゐやアがる……然し悪い洒落ぢやなからうぜ、まづ一

杯。』

『オット待つたり、先づ僕のを聞くべし、奇想天外、然も今着く驛で洒落るんだから新しよ、稲毛だ〜とは何うだい。』

『ウフ、嫌だぜ壯さん、稲毛へ着いて稲毛だ〜ぢやア當然ぢやアないか。』

『何、洒落だい莫迦々々しい。』

『あゝ焦れツてえ、此稲毛だ〜とあわてた様にいふ所が洒落なんだ、解らねえのかな。』  
『あわてたツて落着いたツて、稲毛へ着いて稲毛だ〜が何で洒落だい、をぢさん解つたか。』

『解るも解らないも、解り過ぎて解らないや。』

『ぢやアモウ一遍言はふ、いゝかね、あわてた様な聲をして、眼の色を變へて、いなげだ〜とね。』

『まだ解らない。』



六

「えッ、チリ／＼するなア、身投だ／＼といふ洒落だ。」

「ウフ、、呆されたなア青ちゃん。」

「ウムン物が言へないね。」

「然し奇想天外だらうアハ、、。」

おそらくたわいの無さ加減。世智辛過ぎる今日にも、彌次喜多の血筋は絶えず、もし人間の賣立てでもあれば、此れ珍品！

駄洒落る程に、飲む程に、三人で一本の四角な瓶は忽ち空ツぽ、顔がさくらでトロリと成東、あゝ心持がいゝ岡などと、漸く喋舌疲れて眠くなる時分、

「松岸ツ／＼。」

と驛員の聲。

「オットお出でなすツた、壯の字、青的これからが此方の世界だ。」

と金兵衛。中での年齢ながら、曾遊の土地の嬉しい想出に、先づ顔の型を崩したはいゝ

が、さて其の驛に降りて見ると、風雨益々物凄く、驛の電燈は停電、驛員のブラ下げた角燈だけが心細々濡れた砂利を照すばかり、外は眞暗。

唯雨の音、風の聲。

四

「をぢさん、何ういふ事になるンだい、此方の世界だなんて嬉しがつてゐられなくなつて来たぜ、なア青さん。」

「何しろ眞暗で、何處が何うだか判りやアしない、然しをぢさん行く道の見當は知つてるのだらうね。」

「さア。」

「オイ／＼をぢさん、さアなんて茲に至つて考へるのは心細いな……あゝ／＼外はヤケな吹降りだぜ。」

六



交

「此方の世界どころか、凄い世界になつたもんだ、何しろ彼の雨屋の音を聞いてちやア、う  
つかり驛から外へは出られないよ、然しをぢさん、まさか道を忘れてゐる様な事はあるま  
い。」

「其れがさ……實は、十年ばかり前に一度来たゞけの話だからね、斯う眞暗だと少し判り  
兼ねて来るよ。」

「ぢよ、ぢよ、冗戯ぢやアないをぢさん、何うして呉れるンだい……壯さん、大丈夫か  
50」

と青さん漸々心細氣な聲になる。

「ウームあんまり大丈夫ぢやないよ、驚いたなア……オイをぢさんツてば、何うするンだ  
よ一體。」

驛の窓の硝子戸が、ガタンゴトン、外は察しもなく風の聲がヒューウウ、雨の音ハザー  
ザツと来る。

「まア兎も角も出掛けて見やう、何でも慥か方の方へ行けばいゝと思つたよ、歩き出し  
たら何うにかなるだらう、然し身拵らへだけは嚴重にする事だ、いゝかい尻でも端折つて  
……此先何うなる事かわからないから……。」

流石のをぢさん當惑したが、先達だけに萎氣でもゐられず、勇氣を出して驛を飛出し洋  
傘の柄に獅嚙ついて横なぐりの風雨を斜めに、

「さアお出でツ。」

と景氣をつければ、

「チョッ酷い目に遇ふものだ、遊山大敵ツてなこれだね。」

と壯さん苦しんで中で洒落をいきみ出す。

「イヨ壯的感心々々好い出来だ」

などと金兵衛此際褒めて胡麻化す。

「アハ、壯さんおだてられてるから世話アない……オイくをぢさん、出掛けるのはいゝ



が、此場合心得た顔をしないで驛員に訊いて見たら何うだい。」

と青吉が云へば、

『いゝよ、気が利かねえ、訊いてゆく様な場所ぢやアない、何うやら見當だけは思出したよ、大船へ乗つた氣で出掛けた〜。』

『何が大船だい、此雨風ぢやア難船が思ひやられらア。』

と愚痴たらぐ。

其れでも驛の内は、間に合はせに點けた事務室の洋燈で、どうやら明るみはあつたが、外へ出ては鼻の先の顔もわからず、風の息つく間を、ピチャ〜と雨の泥濘を刎返してゆく心細い音。

暫くは洒落も停電、驛前の原らしいのを左り手の道らしい方へ、吹降の闇をトボ〜ゆ有様は、ズキの廻つたお尋ね者と云つた恰好、暢氣な因果といふものなり。

『だがオイ壯さん青ちゃん、斯ういふ時は元氣よく唄でも謳ふ事だよ。』

『へッ苛められて唄はせられりやア飛んだ妹背山のお三輪といふものだ、なア青さん。』  
『馬士の唄など謳やいのウと来たか、ア、ーお前さんとなア、ならばよウ、えいどこまアでもよウーか。』

と青さんヤケ糞で謳ひ出せば、

『ハイ、ハイ、ハイ。』

と金兵衛調子をとる。

現代離れの暢氣さ加減を、戒める爲の兩師風伯も、斯くまで圖抜けて來ると遂に根負がしたと見えて、いつか風はしづかに、雨も小降り、雲の切れから闇に薄ら明るみを漏して、翌日は晴れらしい空模様になつて來た。

『しめ〜、ソラ御覽、みんな元氣を出して唄を謳つたから、天も感應ましまして、霽りさうになつて來たぜ。』

『そりやアいゝが、をぢさん、唯出たらめに歩いてゐて宜いのかい。』



「まつたくだ、何だか知らないが、芳流閣なんてえものがありさうにも想はれないぜ、人家も稀れなる陰々滅々たる田舎道ぢやないか。」

「心配しなさんな、漸々見當が確然とわかつて来た、此陰々たる道の盡きる所、萬燈パツと輝き、絃歌忽ち湧くと来るんだ、愈々是からが此方の世界だ。」

「へッ其世界が當にならないや、なア壯さん。」

「第一此先に其塵所があるンなら、如何に雨の晩だツて、まだ宵の口だぜ、一人や二人の人間に出會ひさうなものだ。」

「まア文句は彼方へ行つて見てからにして貰ひたいね、きつと嬉しがつて日本へ歸るのが嫌になるに相違ないよアハ、ハ、ハ。」

## 五

佐原から船を仕立て、あやめ咲くとはしほらしい、花が物言ふ、其れは三馬の昔時から

矢立が萬年筆となる今日まで、遊子チヨイチヨイ旅日記を染める所、其潮米出島を彼方に廻して、同じ流れの幾曲り、利根の水で白粧を溶いて、色香を競ふ菩薩の家形、主を松岸といふ此地は、同じ水郷の水は粹に通じながら、雛奴が振りの潮來ほどには知られてゐない。

然し其れほど知られなからうとも、汽車の窓に客を求めず、銚子ヶ濱の大漁祝ひ、板子一枚下は地獄の勇ましい阿兄輩が、鯉の氣前に躍り込む桺樂浄土、偶々氣紛れた旅の遊子が川に臨んだ夢を見上げて、芳流閣は稱んだもの、これなる三人旅の先達金兵衛にしてからが、十年前にたつた一度来たといふうろおぼえ。

菱氣てをかしくなり、まごついて興がる、小降になつた雲切れに一層元氣を取りかへし『わかつた、慥かに此道、エへ、此道は格別といふもので。』

と、驛から闇を鍵の手に三四丁来て、一ツ二ツは灯の見える街道らしい道巾を斜めに突切り、さらに小暗い小路へ入ると、何うやらお見當の風情ありげになつて来た。



軒の低い小家が續いて、御料理、おしるこなどといふ燻ぶつた灯燈が、水溜りへ淋しくうつつて、而して其家々は今夜の雨に客も待たず、大方は戸を半ば閉てゐる。

「愈々来た、こゝだよ〜。」

と金兵衛が云へば、

「何だいをぢさん、萬燈パツと輝やき、絃歌忽ち湧くとはこゝの事かい、ねえオイ青ちやん話半分といふ事はあるが、お話の氣もないのは呆きれたね。」

「まつたくだ、何だか厭に悲しい氣のする所だぜ。」

「左様云ふなツてことよ、こゝらに並んでゐる家はこれが引手茶屋といふものだ、花降りかゝる仲の町……。」

「ウフツ言ふことは凄まじい。」

「ハテ陰々たる眺めぢやなア。」

「オツト貶さずとそこいらを曲つて御覽んよ、芳流閣はソレそこだ。」

と、其東京で見る場末の長家氣分の様な、而してどことなく安價な艶ツぽさを含むでゐる、軒續きを曲ると左り側に見上げる兎に角高樓、其前を出ぬけて右に小濠を廓してもう一ツ高樓、其側路はやがて盡きて、利根の大河が闇夜ながらに廣々と白く望まれる其の二ツの高樓が潮來と競ふ姫の館。

「ハ、アこれかい芳流閣といふのは、聞きしに勝さるとは言ひ憎いね、然し利根から家根だけ眺めたら鳥渡オビヤカされるやつだ。」

「だが壯さん、恁處所に此の二ツの高樓は、聊か意外な感じもするね。」

「オイ〜青ちやん、少し白粧の香が濃くなつて來ると軟化して來るんだからやりきれない。」

「だが愚痴も混ツ返しも川に突當つたちやア、こゝらで往生せざるを得まい、そこでをぢさん、是から何ういふ手續きになるんだい。」

「ナアニ別に所得税申告程の面倒な事はないよ。」



『家に小兒と老人の居る者は、お上のお情を持ちまして割引になる様なわけにはいかないね。』

と壯六が云へば、

『オイ、其塵當込を言つて、里心がつきやアしないかい。』  
と青吉が云ふ。

『里心は先刻停車場へ着いた時から起つてゐるのだ、たつた一人の父親が此雨降に恁處所をさまよつて居やうとは家の子供達は知らなからう。』

と壯六はトボケながらも熟々といふ。

『其塵事を云ひ出すと、妙に身に泌みて來るが、然し何だね、考へて見ると僕等に妻子のある事が不思議といふものだね。』

と、金兵衛は思はず其イケ年齢を顧みる如く撫然として云つたりけり。

やがて其れなる引手茶屋へ飛込んで、轟々宜しく其水閣の粹客となつたが、さて此輩、口で女の子が何うの斯うのといふもの、遊びは勿論座興ノ意、されば其れから總揚と奮發して、松岸名物の其如達が、ド、ンと打込む大太鼓と共に、家鳴震動の大漁踊りの始まり。

と斯様書けば、どうやら花々しく陽氣な氣分にも想はれるが、これを實録で懸値なしに書けば、

樓閣の大廣間、空御殿の如く古びて、疊は赤黒く光りを帯び、二十何人グルリと輪を作つて何にが仰して此大漁年と手振を揃へて踊る姫なる者の態姿たるや、何れ豚やらもんぢやら、然も其手振足取、ヨンヤコラが杭打の綱を曳く如く、亦廊下に持出した大太鼓を打込む者は、汚れたメリヤスのシャツに半股りといふ身禮御免の荒くれ男、此れに加へて地方に並ぶ藝妓三人、女按摩にさも似たり。

金兵衛は兎に角會遊とあれば、此光景は覺悟の前だが、壯六青吉は唯呆ツとばかり臆を、



消し、芳流閣からころがり落ちる信乃現八、ホウ／＼の體で身を退がれ、其翌日銚子の濱へ浮び上り、運強くも芽目度く命を取止めたとなり。

銀婚旅行 別所温泉

別所温泉

左様申しちや何ですけれど、疊と女房は新しい方がいゝなんて、随分昔時の人はひどい言を云つたものぢやありませんか、そりや、疊の切れたのやあかくなつたのは取替へなくツちや不可ないにきまつてますけれど、女房はそんなわけのものぢやないでせう、いゝえわたしに左様云つた事があつたわけぢやないので、何もそんな言を云ひ出さなくともいゝんですけれど、兎角男といふものは自分は勝手な真似をしながら、何ぞといふとよく其塵言をいふものですから、女は割に合はないものだといふ事を、ついでに鳥渡云つてみましたの……え、實はその何ですの、今年で恰度良人と添つて廿五年、型ばかりでも



銀婚式の眞似事をしやうといふ事になりましたので、今更に過ぎ去つた廿五年のさまぐが想ひ繰られ、あんな事もあつた、こんな事もあつたと考へますと添ふてこゝまできて、まつたくホツとしましたわ。

正直なお話が、女のその割に合はないといふ苦勞の數々も、今日になつてみますとマアやり徹した甲斐があつたわけなんですから、今更決して愚痴でいふんぢやありませんの……けれど、時にはまつたく、わたしの氣も知らないでと、口惜しがつたり、泣いたりねオホ、尤もそりや、子伊等のできないうちの事ですわオホ、。

わたしは十八、良人は廿七で、心細い月給の取初め、わたしは幼い時分父に別れて母と二人で侘しく生活してゐましたのが縁あつて一緒になつたんですから、婚禮だつて、お耻かしい事ですが、まつたくの所が、細く長くお蕎麥の婚禮といふわけだね、想へば夢の如くではありませんけれど、然し考へ出してみますと、其時分の事がまざくと描かれて來ますわ。

何だかいふのに氣がさし江すけれど、良人は随分な氣儘者の割に、其時分から勉強家でございましてね、婚禮の明る朝、其時勤めてゐたお役所へ出掛てゆきましたの、前夜の御馳走の残りをわたしがお辨當に詰て、前夜と同じ袴を着けましてね、わたしが送り出しながら、

『行つてらツしやいまし。』

と、自分の耳にも道らない程な聲で云ひますと、良人は、

『やア失敬。』

ですツて、今考へると噴笑さうにおかしくなりますけれど、其時は良人も、鳥渡まごついたのですわオホ、、まるでお友達にでもいふ様に、やア失敬ツてんですからね……其れでその夕方良人の戻りの遅かつたこと。

あら、『お手放しで恐入ります』ですツて、廿五年前の事ですわよ、お話の順序よオホ、ホ、。



然し、廿五年前の這摩時の事から云つてゐては、なか／＼本文に入りませんから、そこらは宜加減にして置きますわ、え、何ですツて『何卒左様いふ事に願ひたい。』なんて御挨拶ですわね。

惣領が男兒、次ぎが女兒、其次ぎが男兒と追かけて三人出来まして、そりや大抵ぢやありませんでしたわ、其時分の良人は、お役所へ通つて勉強はしてゐますものゝ、臨時雇ひから漸つと本雇ひになつた位ゐの所だつたのですから、幾程ものなりの廉い時分だと云つても、やりきれたものぢやありませんわ。

ですからわたしはもう、其二人目のが出来ましてからといふものは、見ても外聞も云つてられやしません、仕立物の看板を出しますやら、割がいゝといふ内職は随分とやつたものです。

たとへ足しない世帯でありまして、嫁入つた其當座一年程は、わけもなく楽しいものでございましたけれど、兒が二人となり三人となりましてからといふものは、自分がぶツ

かぶつてあくせくするばかりでなく、良人のお役所へ行く羽織の綻びさへ氣にしながら幾日も／＼もうつちやらかして置いたりしましたわ。

惣領が五歳の祝ひの時に、銘仙の仕立卸しを着せて、わたしは嬉しくつて涙ぐましい位ゐだつたのですから、宜しく御察し下さいまし。

其れでも、良人の一生懸命は、何時か身分相應に好い運を迎へましてね、其惣領が小學校に上ります時分は、お役所勤めから今の會社勤めに變へまして、申さばマアめきめきと位置が昇つてゆきましたの、自然わたしも人仕事や手内職を廢めまして、末の兒のチヨコチヨコ歩く時分は小女の一人も附て置く様になりました。

さア、廿五年の今までを分てみますと、添ふて一年程が、まつたく世の人の又ない春といふものでございましたらう、其れから五六年が泌々と世帯の苦勞、而しての後の十幾年、其にも勿論世帯の苦勞は續きましたけれど、然し其苦勞をしながらも、十圓の家賃を十五圓に、たとへ一間でも廣い家へ住む様になり、道具衣類も次第に殖へれば、人出入も多



なり、家の手狭を感じては、漸々家賃の高い所へ越してゆく様なわけなので、つまり苦勞にも張合があるといふもの……が、さアそこですわよ、左様なつて来て、すわよ、前にも鳥渡言ひましたけれど、男といふものはですね……。

そりや良人などは、窮屈なお役所勤めから、ガラリと變つた世間的な會社勤めに轉じたのではありませんし、殊に貧乏のありたけを盡した揚句、順境に向つて來たのですから、お實際の御酒に酔つて元氣づくのは決して無理ではありません、いゝえ、いゝえ、調子に乗つて皆様のよく仰有る脱線などをする様な事はなかつたのですけれど、其れでもその時々會社の用事が夜半までかゝつたりする事があつたりしました。

同じ羽織の綻びでも、苦しい時分縫ふ間もなくツて氣にした綻びと、どうにかなつて來てから、酔つて歸つて來ての綻びではそりや氣に爲方がちがひますわ。

ツイ愚痴を云つたりしますと、

「おつきあひだよ、俺だつて迷惑だな。」

と雑作もなく打消されて了ひます、打明たお話が、一時は其おつきあひが重なつた事もありました。

然しまア、左様いふ時は、それだけに暮し向きも樂になつて來てゐるわけですから、良人が酔つて戻つての申譯が、子供の衣類にもなりますし、わたしの欲がつてゐた帯にもなる様なわけで、ミシンを踏んで内職した以前と比べれば、結構とも云へますわね。

泌々瘦ぼつたくなる苦勞よりは、チヨイと口惜しい苦勞の方が、そりやマア宜うござんすわよ。

左様な時代が、一ツきり済ますと、物領の兵隊検査、娘の嫁入、末の子の中學試験といふ様な事でそれぐに、氣を揉ませられまして、それが何らか片附きますと、良人はわたしを、

『オイ婆さん』

なんて呼ぶ様になつて了ひました。



女は三十までを花だと云ひますが、その三十までを子供を抱へた貧乏世帯で、唯ヤキモキと送つて了ひましたし、漸つとホツとすれば四十の聲、越して銀婚式の今年は四十三、嫁にやつた娘にはモウ赤ン坊ができましたのですもの、お婆さんにはちがひありません、良人は最早五十二、其れでもお蔭様で其順境でございますので。ほんの眞似事ではありまされど、今度の銀婚式にも日頃お世話になつた皆様をお招きして手料理ながら一献差上る事も出来ました様なわけ、而して良人が云ひますには、

「おまへを娶つた時には、所謂お蕎麥の婚禮引越女房といふやつだつたのだから、新婚旅行なんてえ氣の利いた眞似はできなかつたから、此銀婚記念に遅まきながら銀婚旅行と出掛やう、お互ひにどんな心持がするか、其れでもまた若返つて一働きできるかも知れないよ。」

と斯様云ふのです、わたしは正直に、ムキ出しに云つて了ひますが、這麼嬉しいと思つた事はありません。いゝえ、決して若い時にある様なうかくした嬉しさぢやないのです、さアね何と云つたらいゝでせう、凝きつた肩が一時にほごれて、眞からホーツとしましたの、而して新しく湧いた嬉しさでも云ひませうか。

それでも、孫のある程の身は、

『二人ツきりでどすか。』

とふしぎな様な感じもしまして、斯様訊かないではゐられませんでした。

「當然だよ、たとへ銀にもしろ婚の字の附く旅行に、誰れも伴て行きツこなし、そろそろ皺になつて来るお互ひの洗張といふものだ。旅行中はおまへを婆さんとは呼ばないでやうアハ、ハ、ハ。」

と良人は笑つては云ひますが、其れは決して戯談ではありません、眞實の心からです、申さば今までのわたしの苦勞を慰めてくれやうといふのです、



『おとうさんと二人ぎりぢや後生詣りの方ですわね。』

と——わたしは良人を、子供等がおとうさんと呼ぶのから、自然呼び慣れまして共に、おとうさんと呼んでゐます、其れは何方でも子を持つて後はみんな左様でございます——  
で其後生詣りの方だと云ひましたら、

『莫迦云へ、後世詣りは金婚式の後だ、女は四十越ちやア婆ア臭くなるが、男の五十がらみは働き盛りだ、早くにおまへを娶つたから今日銀婚といふ事になつたんだが、娶つのが遅ければ新婚の婚君でもまだく通るくらゐなものだ、其つもりでおまへも老込んだ事を云はずに、若返つて出掛る事にしなさい。』

と、男は實際、眞實味にも左様した戯談の出る程な若々しい元氣です、わたしも其れではと、まつたく稀らしい程若い心持になりました、其銀婚式の翌日の朝、銀婚旅行に立つ事になりました。

行先は、箱根？ 鹽原？ 其れは何だか新婚の人の力が行きさうな所といふので、銀婚

らしい質素な所といふ詮議から、信州の別所の温泉といふのへ行く事にきまつて——勿論良人は忙がしい體でございますから二晩泊つて三日といふ旅程なのです、

『長くなると、孫の顔が戀しくなるからな。』

『さうですね、あんよができる様になれば伴れても行けますがね。』

と、ツイ這麼言葉が交されます、實際祖父さん祖母さんといふにしてはお互ひにまだ若い方ではあります、娘が生んだ赤ん坊は孫に相違ないので、子より出て子よりも可愛といふ其れはまつたくで、若返つての其旅立にも、左様思はれるのでした。

『停車場まで送りませう』

と娘が孫を抱へて云ひますのを、良人はあわて、老人臭くなる氣を打消す様に、

『オット其れには及ばない、今度の旅はかあさんと二人きりの世界にするんだ、出際の汽車の窓へ、孫を抱上げてアバくせられては同じ嬉しい氣分でも、其氣分が違つて來るからいけない。』



と手を振つて、家を出るから二人きり、避暑にはまだ早い初夏の朝、ほんとうに、今までのにをほえない心持で、信越線で上野驛を出ました。そりや今までとて、何うやら順境に向ひましてからは、時偶には家中して日歸り程の旅はしましたけれど、たつた二人で斯様した事は、古く其廿五年前の事、心細い新世帯とは云ひながら、一緒に散歩旁々夜店へ買物に行つたりした、其れ以来の事なのですもの、お互ひの年齢となつて見ますと、何だか勝手の違つた様な、ふしぎな感じもして來るのでした。

子供と云つてもモウ末のが中學へ云つて程ですから、例へば一緒に出掛るところで纏はられる喧さい事や世話の焼ける様な事はないのですけれど、さて其れも伴れず二人ツきりといふ事は、何となく物足りない手持無沙汰な氣もしまして、深谷、本庄、そこから邊りから旅に出たといふ氣が自然に深くなつて來ますにつけ、『ねえおとうさん、三郎を伴れて來てやれば宜うござんしたね。』

と、末のを伴れて來たらきつと、景色のスケッチをしたり、生意氣な言を云つたりなどするだらうと、其塵事が想はれて、わたしが云ひますと、『うむ』

と、やつぱり良人も、心は左様なつてゆくと見えまして、二人の世界など、若返る其れとは伴はない年齢には勝てぬ心持がして來るらしいのです。

然し其れが、銀婚式を迎へただけの眞個の心持なのでせう。

同じ列車の乗合に、さほど違はぬ年齢の夫婦が子等を多勢伴れてゐるのを見るにつけて亦、此方が子の無い夫婦と想はれはしまいか？と、其塵事が妙に氣になつて、わたし等だつて、家には立派な忤もゐる、娘の許には可愛い孫もゐるといふ様な事を、心密かに誇つてみたり、

『ねえおとうさん、彼の方達もいゝお子持ですな。』

『うむ、家の三郎と同じ様なのが物領と見えるな。』



『彼の窓へつかまつてゐるクリ／＼肥つた男の兒さん、恰度三歳位ですわね……家の孫はまだ明後年にならなくツちやアあゝはなりませんね。』

『左様さな、だが案外智慧が早い様だから誕生前に歩くかも知れないぜ。』

『左様かも知れませんか……彼の御夫婦はわたし等より少し若い様ぢありますが遅いお子持の方ですわね。』

『俺の方には孫なんだからな、此方は些早い子持過ぎたよ。』

『其代りお互ひに早く樂が出来ますわ……左様々々ねえおとら、あん、樂ができるよ云へば一郎の嫁もそろ／＼心懸なければいけませんね。』

と、話は遂に斯様なつて來ました。悴の嫁の相談！所詮は其が銀婚といふ氣分です。

三

子の愛、孫の愛に心が引張られる様になりました、二人ツきりの世界では何となく氣

がぬけてゐます。而して、さう改まつて二人だけの話といふものはありやしません、ですもの、よし左様したお子等を伴れた方々を見懸しませんでも、話の種は、子の事とか孫の事とかより外ありません、然し其れが亦此上のない二人の楽しみなので、殊に女は左様ですわね。

避暑には未だ些早いといふ時分ですから、其塵には込むまいと思つてゐましたが、案外な込み様で、近來の旅行流行が想はれます、わたし共の席とは大分隔れた彼方の隅に目の覺る様な草と紫をかけ合はせた様な色合の羽織を被た美しい若い様を、其撫肩をそぼめろ程、無理からに掛させて、其前に口髭を潮つと置いたといふ様な若い旦那様が、ヒョロ／＼と高い洋服姿で、網棚の縁につかまつて、時々其奥様の前髪の上に首を下げてはいたはる様に何か云つてゐます、が、其奥様は音會釋で受けて、兎角俯向た儘お膝に置いた手提の銀鎖をダイヤの光る指に巻いて見たりしてゐます、と、其れを見つけた良人は、

『オイ／＼見ろ／＼、彼れは新婚だぞ。』



と——元來良人は遠慮なしな質だものですから——わたしを願つて憚りのない聲でいふのです、そりや彼方へは聞こえはしませんけれども、傍の方には聞こえるぢやありませんか、わたしは何だか氣のヒケる様な氣がしましたの、

『何ですなあなた。』

と、わたしは低聲で、押へる調子で云ひますと、

『何も悪口を云つてるわけぢやない、人間彼の時代が羨ましいといふものだアハ、、、。』

と、良人は斯様云つて笑ふのです、すると良人の隣りに掛てお在の、同じ年齢の大商人の御主人とでもいふ様な方が、伴のない對手欲しさと見えて、良人の言葉を調子よくうけて、

『イヤ大きに左様ですなあハ、、、。』

と一緒になつて笑つてゐます、然し左様いふものゝ、羨むといふよりは、謂はゞ櫛つたいとも申す様な態度がうけとれます、わたしは亦直ぐ娘の夫婦が想はれるのでした。

其れがキツカケで、良人は隣り合はせの方とお話を始めました。

『どちらへお出掛ですな。』

『え、鳥渡一日二日信州へ遊びにな。』

『そりや結構で、御二人で善光寺へお詣りといふわけでございますかな。』

『なる程善光寺詣りとお見立、イヤ左様でせう。』

と良人は鳥渡恐縮した顔で笑ひながら、

『婆ア遅れですからなあアハ、、、。』

と天窓を搔いてゐます。

別に其方も老人扱ひをして云つたわけではないでせうが、左様云はれれば、自分から左様感じられて了ふのですから、何うも爲方のないものです。

『イヤこれは失禮、左様仰有られると謝りましたなあハ、、、善光寺ぢやないのでございましたか。』



「えへ、甚だ無信心の方でな、別所の温泉がいと聞きまして、二三日遊んで来やうといふんで……。」

「別所の温泉、イヤ其は宜うございますな、私も先年鳥渡行つた事がございました。彼所は土田を控えて居りますから養蠶の旺んな所ですテ。」

「左様でございますか、私共は初めて行くのでございます……時に貴方は何方へ。」

「イヤ私は高田まで商用で出掛ますので……。」

「御商法は、どういふ御方面で。」

「呉服を取扱つて居りますので……失禮ながら貴方は。」

「つまりらん會社へ勤めて居ります……如何ですお景氣は。」

「こゝへ来て漸つと夏物が少し動いた位なもので、盆でも過ぎましたらパツタリでございますせう……此秋は想ひやられますな。」

「、其方も軽い口、良人も口まめに、旅は道伴れの對手になりました、頻りと話込みま

すが、其れも漸次に堅くなつて了ふのでした。

上野驛を出たのが朝の七時廿分、お子さん連れの方達は高崎で降りて、伊香保へ行くらしく、彼の新婚のお二人は磯部で降り、西洋人の婦人連れは輕井澤で降りました、列車内は漸く空いて、

「漸つと少し樂になりましたな、私は未だ丁場が些長うございますから失禮します。」

と云ひながら、お隣りの方は空氣枕をふくらませて、一眠りするお少度、

「イヤお蔭様で怠屈をしのぎました。」

「私こそ一人なので、飛んだ御迷惑なお喋舌をいたしました、別所へお出なすつたら柏屋の別荘といふのが一番宜しうございます。」

「左様ですか、御親切に有難う存じます。」

「では失禮。」

と其方は空氣枕を窓の椽に當てかつぐ様に首を横向きになすつて了ふ。



「此方は最早一時間ばかりだ、どうだい少し乗疲れた気味かね、別に頭痛もしないかね。」  
 と、良人は斯様云つて呉れます、稀らしい長途の旅でありますし、其二人きりでありま  
 すので、茲まで東京を離れて来ますと、子や孫や家の事の頭腦を云らない老人臭い屈托が  
 自然から離れてゆきまして、左様した良人の言葉が、嘗ておぼえぬ程身に泌みて、  
 『いゝえ何ともありませんわ。』

と答へながら窓から覗く草野の果の山の景色を眺める眼に、何とも云へない深い深い心  
 持の泪が浮かむぢやありませんか、わたしは密つと拭ひまして、

「碓氷のトンネルは随分長うございましたね。」

などゝ、まぎらせて了ひました。

輕井澤の邊りから、伸びくと高い草の花が咲きつゞいてゐます。

「オイ彼れは月見草といふのだよ。」

「何だかこゝらは秋の様ですわね。」

斯様云つたわたしは、フト想ひました、よしこれが新婚の二人にしろ、こゝらを通りな  
 がらの言葉には、やはり這摩言が交されるのだらうと。

わたしは密かに左様想ひまして、自分ながらふしぎな感じの微笑が出るのでした。

四

沓掛、追分、過ぎてゆく其驛の名も何となく旅情をそゝります。

以前は都會の人の樂しみと申しますと、女子供は芝居活動などを何よりとし男の方達は  
 何かと名を附けてのお茶屋遊び、それから二次會といふな事で、まア女は芝居を觀て泣く  
 のが面白く、男の方は美しいのゝお酌に興をやつてゐたものですが、其お茶屋遊びには遊  
 興税、芝居には觀覽税などゝいふものを取られる様になりました、いゝえ、わたし共はな  
 かゝ、何れにしても芝居などへ參つた事はございませんが、人様のお話で聞きますと家  
 中四五人揃つて歌舞伎座とか帝劇とかを見物する事になりますと、平土間程度でも五十圓



足らずはかゝるさうぢやございませんか。

其れに時代と共に、人様の趣味も變つてまゐります、生氣なむづかしい言を申す様でございしますが、よし理屈張らない人々にしまして自然から思想は向上して來てゐますし、趣味も向上してゐます、平常都會に働いてゐる時折の樂しみには、都會を離れて、春は花に、秋は色草に、夏は海へ、冬は山の出湯などに、よし一晩泊りか、日歸りにしましても、樂しみながらどんなに體や頭腦を養ひませう、ですもの近來旅行の流行ますこと、いゝえ其れは決して流行といふ一時のものではございませぬ、と、わたしは稀らしいけふの旅に、いろ／＼な感じの起る其中から、清塵事も亦想はれて來るのでした。

時にフトわたしは、

「これで、何うでせうね……わたし等は金婚式が出來ますかしら。」

這座言が、想はれるまゝに言ひ出しましたら、

「出來るともさ、其時は善光寺詣りだアハ、ハ、ハ、ハ。」

と良人は斯様云つて笑ふのでした。」

いつか上田驛へ着きました、其れは午後の一時過ぎ、恰度東京から半日ですわね、こゝまでの景色と云つては、妙義山の削り立つた様な姿や、碓氷峠の前後、輕井澤邊の美しい草野、そのくらのなものでしたけれど、それからそれと起るいろ／＼な感じに少しも倦きるといふ事を知りませんでした。

「別所まではたしか二里ばかりときいた、贅澤をするわけぢやアないが、自動車を奢らうね、銀婚旅行らしくな。」

と斯様云ひながら、良人は驛前の自動車店へ駈てゆきまして、やがてわたしを、

「オーイ、」

と呼んでゐます、男はやつぱり女とは元氣がちがひますわね、今更に左様感じますのもおかしふございませぬが、良人の元氣のよさを見るにつけて、亦わたしはわたしの生甲斐を感じました。



停車場前の廣場を、左りへ行くのが別所への道で、右へ爪先上りに見えるのが上田の本町だとの事でした、上田紳はわたし共も存じてをります、其織元の町といふ事が、女には一種の懐かしみをおぼえさせるのでした、尤も別所の方へ行く道は、申さば上田での場末の町でもございませうか、軒の低い小商人の店がコセ〜と續いて居ります。

「賑かな町でございませうね。」  
 「うむ上田は昔時から中仙道での目抜きの上地さ、歴史でも名代な眞田の城のあつた所だよ。」

「城下なのでございませうね。」

「左様さ、彼の關ヶ原の戦ひの時に、關東勢は二手に分れて、秀忠は中仙道を上つて此上田まで来たが、遂に眞田の爲めに見事に喰止められて了つたといふ、戦國時代の名残多い所なのだ。」

と、まつたく今度は見るからに二人の世界といふ様な、自動車の中で、良人は頻りと案

内して呉れます、わたしは其れを聴きながら窓の外を珍らしがつて眺めてゆきますと、繁昌なこゝらの土地でも、さすが地方だけに、自動車の往通ひは目立つと見えまして、往來の人等が中のわたし等を覗き込む様にしてゆきます、たとへ地方とは云ひながら、あまり乗つた事もない自動車になど乗つて、覗かれたりしますのは、大層もの〜しい、晴れがましい氣がしてなりません。

そこが良人の銀婚旅行らしくといふ所でございませうが、わたし共の様な苦勞な世帯を知つてゐる者は、何だか勿體ない、而して柄にないとばかり想へて、折角斯様してゆきながら誇り氣な心持にはなれませんでした——それは決して悪い氣はいたしませんが。

其上田驛前の廣場から、左りへ賑やかな町を通り越し、鍵の手に左りへ曲りますと、今乗つて来た汽車が烟りを残して行つた線路の踏切りで、其れを過ぎると上田橋といふ鐵橋にかゝりました。

「さア、こゝは千曲川の下流だらう。」



旅いろしもお

「隅田川より廣うございますね、ミア御覽なさい。河原の洲に美事な花が咲いてゐますね  
何でせう彼の花は……。」

「菜の花によく似てゐるな。」

「まさか、今時分菜の花ぢやないでせう。」

「そこが田舎だから遅れてゐるのだらうアハ、ハ、ハ、ハ、。」  
なんて、良人は這麼瓢輕な言を云ひます。

五

別所温泉といふ所は、上田から二里餘り、山々を遠巻にしました田圃道の盡きる所なのでございました。

旅と云つては、まつたく今までほんの日歸り、良人が勸め先の社長さんの別荘が大磯に  
ございませので、そこへ良人と招ばれました事が一度と、其れから子供等と江之島鎌倉へ

一度、其外とても漸つとそこいらの程度で、よく皆様のいらつしやる箱根の熱海といふ  
所さへ、お話を訊くばかりで、まだ參つた事がないのでございます、いゝえ其れは前にも  
申しました通り、お蔭様で近來は順境なのではございますが、何うしてなかく、良人が  
お交際で皆さんと時折出掛ますのは兎に角、世帯の女は左様はいかないのでございました  
けふも自動車の中で、

「なあ、これからは時々斯様して出掛やうぢやないか、其内一郎に嫁でもできれば、愈々  
此方の世界だからな。」

と、其れはやつぱり老人めかしい言葉ではありませんが、わたしは亦泪の潤む嬉しさを感じ  
じまして、苦勞した甲斐、生甲斐を想はないではゐられません。

汽車の中で隣り合はせの方から訊いた柏屋の別荘といふのへ、自動車は着きました、成  
程、其宿が此湯の町での別して立派な宿なのでした、其宿の外の方は、温泉場といふも  
のを知らなかつた、わたしには案外な感じがいたしました。

別所温泉



實地には何處も知らず箱根や熱海のお話をよく訊き、而して其繪葉書などを見ても温泉場といえものは、左様いふのだらうと想像して居りましたのですから、案外な感じのする筈でせう。

苦勞をしましても都會に暮らし居ります者は、都會から離れない目で想像して了ふのですね、然し、其相屋の別荘だけは左様した想像を裏切らない程、立派でもあり、調つてゐるのでした。

が亦、案外な感じがしたといふ外の宿屋の其れも、決して悪い感じではないのです、昔時の儘とでもいふのでせう、煤けた軒に湯の烟る様は、何とも云へない懐かしさをおぼえるのでした。

鳥渡申し遅れましたが、上田から此處までツイ此頃から電車が通じて居ります、彼の上田橋を渡り越した所が起點で、恰度自動車の道と綾になつて、湯の町の二丁程手前へ着くのでございます。

自動車は上田から約四十分、

「オ、最早二時過ぎたなア。」

と良人は時計を見ながら、

「汽車の中で何にも喰はなかつたから、腹が空いたらう、俺はペコ／＼だ。」

と、通された部屋へ脚を投げ出して、さもひもじさうにいふのでした。

「わたしはふしぎに些も空きませんの。」

と實際わたしは、今朝早く少しばかり掻込んだきり、最早そのお晝過ぎも二時廻つたといふのに、一向空腹をおぼえないのでございます、やつぱり其れは、いろ／＼な感じ、さまく／＼な思ひ、其れをひつくるめて、亦言ひ難い楽しさが、お腹を充満にしてゐるのでございました。

「お腹の空かない所が、未だおまへの若い所だよ、金婚式の時代になつて御覽、見得も外聞もない喰ひ意地ばかりになつて来るからねアハ、ハ、ハ。」



『オホ、金婚と云へば、さアわたしは七十に近くなりませぬわねえ、貴方は八十に近い方ですね、考へてみますと、一郎がそろ／＼今の貴方の年齢になるのですよ、オホ、た様なると孫ぢやなくツて會孫をみるのですね、何れ世の中も亦變る事せう。』  
『何れにしても長生きをしなくツちやアつまらない。』  
『ほんとうですわね。』

と眞にわたしも左様思ひました、そりや今わたし共が功成名遂けといふわけでもありませんし、亦人様に負けない資産が出来たといふわけでは決してないのですけれど、元氣で働く夫に従つて、世間のお交際なり、時には斯様な旅行など、心置なく出来る様になつてみますと、金婚式の過ぎるまで生きてゐたい慾、いえ、其れは慾ではない人間の自然でございませう。

茲に迎へた銀婚としましてからが、随分古い夫婦ですもの、よし二人の世界で斯様やつてゐましたとて格別話とでもありませんが、然し其鳥渡出る良人の口輕な言葉の中にも、

泌々とした眞實味を感じたのでございました。

通された其柏屋別荘の部屋といふのは、玄關から直ぐの廊下續きの、庭を越した離れの二階で、次ぎの間付きの十疊、恰度此樓は温泉町の稍登りになつてゐる突當り、山ふところになつて居りますから、其二階の欄に寄つて眺めますと、他の湯宿の家根々々や二階窓が、如何にも鄙びて而して賑やかに、そちこちに湯煙りが立つて、着替へた宿の棒縞の浴衣にも湯の香の懐かしみをおぼえます。

町の眞中に相染川といふ流れがございまして、其瀬の音が遠く來た旅の宿の、快い哀愁を感じさせますが、景色としては、山ふところの鄙びた湯の町といふばかりで格別の事もありませんでした。

お湯は、僅かに硫黄の香がしますが、無色透明で、溫度も恰度宜い加減でございます。一風呂浴びて、遅いお中食を濟ませて、其れからそこの散歩に出てみました、其邊りの名所としては、西行の戻橋だの、維茂塚だの、其外にもございましたけれど、何れも其



これは、案内記の附たりだよと云つて良人は行つて見やうともしませんで、  
 『維茂塚なんて、それは此土地に近い戸隠山で例の紅葉狩に鬼女を退治ての歸りがけ、維  
 茂が此別所へ来て一風呂浴びたといふ記念の塚なのだらうアハ、ハ、ハ。』  
 なんて、茶化して了ふのです。

唯其案内記に記した數ある名所の内で、此湯の町の中程を南に入つた所に在る、小山を  
 脊にした高い石段の觀音様、其れは「北向の觀音」と云つて、二重柿茸の白木の年古りた  
 堂宇で、其傍らにある護摩堂などは今から二千年も前のものだといふ事です。

そこへお詣りして、子や孫の爲お守護を頂いて宿へ戻りました。

夕方又一風呂して、二階の欄干から、東京の今時分を想ひながら眺めて居りました、湯  
 の煙りが暮色に薄く、漸次に暗くなつてゆきました、そこらの宿屋や、田舎茶屋の二階へ  
 電燈が點き、其れが行燈の灯とでもいふ様に想はれます。

『どうだい世帯の屈托から離れるだらう。』

と良人はほんとうに泌々とした調子で、

『此れから少し氣樂にしなさいよ。』

と云つて呉れました。

わたしは又何にも云へなくなつて、湯の町の灯を熟つと視る目にほろりと、泪が落るの  
 でした、其れは嬉しさと有難さの溢れなのです！

其晩と其次ぎの晩そこに泊つて、其悠然とした心持は、何だか長い日數を送つてゐた様  
 でした、ほんとうに心の洗ひ張が出来たといふものです。



一宵 行樂 浮かれ薬師

三人で三歩なくなす智慧を出したかね、など、親不孝のが寄て来る、昔時の其れ、湯屋の二階、髪結床の奥といふのが、現今は何々倶楽部と生れ變り、チヨイとしたのでも、會社歸りに球を突きに来る一個百圓以上の好い音をカチーン、カチンと響かせ、碁將棋は勿論音曲の師匠が目を分けて出張に及び、刈込んだチャップリン髭を撫でながら、「冴え返る春の寒さに降る雨も、暮れていつしか雪となり」てなわけで、「やあ君もお始めですか、清元はい、ですなあ。」と、葉巻の煙の紫が、狼聲の間をたなびくなどは、三味線が鞆から出て、師匠がセルの袴

をはいてゐるのとすつかり調和したものなり。

尤も其れは當世紳士風流交際、古いやつでいふ好い衆の寄合——此れは左様まで行届かず、舊式な碁會所を些ばかり今風にして、古い戯作の八笑人和合人の流れを汲むと云つた輩の集り、阿彌陀籤でウキスキーを買つて謎々で懸飲み、浮世床に毛の生えたのを、當世だけに刈込んであまつたらもみあげにおしなさいと喧さく洒落を夕まぐれ。其門口から、御約束の瓢輕な男、

『誰れかゐるか。』

と、つぼめた傘の雫をきつて、土間の隅へ放り出しながら、障子の中硝子から内を覗き、

『嫌に不景氣だぞチヨツ。』

と、舌打をして障子をあげれば、腹這へに寝そべつて、肱を突いて兩手の平を構にして顔をのせ、つまらなさうな顔をしたのが、其入つて來たのを熱つと視上げて、

『オイ未だ降つてゐるか。』



と、氣の重い聲で訊く。

『ウム降つてゐるよ。』

『へつくさくするなあ。』

『何だい茶樂子、君一人ツきりかい。』

『訊くには及ぶまい、二人には見えなからう。』

『變に引かゝるぜ、氣に入らねえ顔をしなさんな。』

『氣に入らねえね。』

『何がさ。』

『雨ばかりピシヨ〜降りやアがつてよ。』

『チョツ俺の故ぢやアない、寶井其角や、小野の小町や、阿倍の晴明や、由井の正雪ぢやアあるまいし、人造で降らせるわけぢなやアい。』

『誰れが君が降らしたと云つたい、嫌に雨通がつて知つてゐるだけの名前を並べなさんな喧

せえツ。』

『ウフ雨通はい、ウフ、だが何うしたんだい、妙に神經をトンガラカシてゐるぢやアな

るか。』

『正にトンガラカシてゐるよ。』

と、其寢をべつたのは恐しくヤケな調子で、顔をのせてゐた手をグタンと脱すと、這度は

其手の甲で、こめかみをツリ上げ、猫の如な眼つきをして、

『ウムウム』

と、唸つたもの。

春雨は過ぎたが、五月雨には些早く、半端な時分の降つゞきは、暢氣が集まる斯様した俱樂部にも出足がぶると見えて、今日は先刻方其茶樂子といふのがフラリと見えて、對手もなしの生欠伸を斯様も出るものかと自分ながら感心の體だつたが、やがて舌打の眩枕、何かは知らず悶えてゐる所へ、漸つと後から今の男が來たのなり。



尤も勝手元には番人兼茶汲の婆さんがゐて、倶楽部員の顔の見える度び、シヨボついた顔を鳥渡出し、

『オヤいらつしやい。』

と、ニヤ／＼とはして見せるが、女の部には些遠く、下唇が鼻の頭を嘗めさうになつてゐるなどは随分古代な品物にて、然もつんぼ！

『婆さん菓子を買つて來な。』

と、云へば、

『ひえツ火事だツ。』

とばかり、其シヨボついた眼を据ゑるといふのだから、其厄介さ加減、とはいふものゝ、此婆さんにして倶楽部の天下は先づ泰平、オツな年増や、意氣な新造が茶汲みとでもあつた日には、始終喧嘩が絶えやせねといふもの。

が何しても、まだ電氣の來ない雨の日の夕方、此婆さんのあしらいでは陽氣になりさう

な筈もなく、殊には其茶樂子の唸り方は何か仔細がありさうなり。

『一體全體何うしたツてえのさ、嫌にウーム／＼唸つたり、オツウ引かゝつたり、イケ年齢をした野郎のヒステリーなんざア困り者だぜ。』

『口汚なく言ひなさんな、這麼いふ時に逆らうと爲にならねえぞ。』

『えらさうな言をいふなよ、唸る程思案に餘つた事があるなら、神妙にして同情を仰ぎねえ、随分世間ぢやア用ひられてゐる男だ、まアさ、何が其塵に面白くないんだい、まさかに雨が降るばかりぢやアあるまい。』

『左様よ、雨が降つて癩に障るのは序でに障つた癩よ、本文は少しばかり込入つてゐるんだ。』

『はアてね……年齢の上から云つても、柄の上から云つても、戀なんてえ筋ぢやアなからうし、と云つて借金で困る様な正直者ぢやアなし、と云つて亦花柳病で悩む程資本のかゝつた體でもなし、と云つて……』



「チョツ、と云つて／＼と失禮なことばかり考へて並べるなよ、え、オイ柳夢子、君等の様な、空氣の加減でムダに生きてゐる人間には、英雄が此口を結んだ息を逆に押返し、鼻の穴からウームと唸り出す程、惱んでゐる心の底は解るまい、噫解るまい……然し亦考へて見ると、ムダに生きてるとは貶すものゝ、唯無神経にポーツとして生きてゐる君等が反つて羨やましくもなるテネ噫……」

「オイ、オイ、オイ、幾分此方が慰めの詞を以てかゝつてやりやア宜い氣になつて、赤ん坊の眠ついた外へ來る豆腐屋ぢやアあるまいし、無神経にポーツたア何でえ……莫迦にするな。」

「妙々、同じくトンガラがつて來やアがつたアハ、ムム。」

あかの他人が聞いた日には、冷々する程、毒口の一上一下、負す劣らず打合はするが、根は罪のない空氣でふくらませた遊び刀、ボン／＼音のするばかりでお互ひに痛くはなく直きにをかしくなるのなり。

「まあさ、舊式で云へば南京豆の袋、新式で云へば亞米利加屋で建築した家屋ぢやアあるまいし、ヨタでもトンガルのは下さらないが、何しろ茶樂子其頻りと唸りを生ずる所を見ると洒落や戯談でなく、眞實仔細がありさうだが、何も倶楽部のつき合と云ふものだ、眞面目臭つて承はらうぢやアないか。」

と柳夢が稍しんみりとした調子になれば茶樂も其寢そべつた體を起しながら、

「ハイ／＼よう問ふて下さりました、元私には中國生れ……」

など、即意の白でいふものゝ、顔つきは不思議に眞面目で、實際態度に元氣がなく、熟つと腕を組んで、這度は唸りではなくホツと溜息をしたもの、

「實はねえ柳夢子、此所僕は莫迦に悲觀をしてゐるのさ、さゝ其仔細一通りお聴き下されかね。」

「相方は篠笛入と來た、六段目の勘平さんなら三十になるやならずだが時に茶樂子、君は幾歳になつたツけなア。」



と、兎角文句は線を脱すが、心持が鳥渡眞面目になつてゐるだけ、久しく思ひもしなかつた年齢の事など偶つと訊けば、

「そ、それだよ〜。」  
と、茶樂は頷いて、

「實はソラ此間此俱樂部でみんなで莫迦騒ぎをした時ね、彼の騒いでゐる最中に、僕はフト考へちやつたのさ、此れ人生觀といふやつだね。」

「ふーむ、こりや少し事が面倒臭くなつて来たぞ。」

「俱樂部員の中でも、僕は年長の方だな……と今更に氣が着いたと思ひたまへ。」  
「成程」

「恐く今まで其慶事を想つた事もなかつたんだが、それがその年齢の故だよ、實に争はれないものだね。」

「やれ〜お話は彌々お堅くなつて来たが、斯様になるとヨタを切込む隙がなくなつて張合

がないが、然し何ぢやアないか茶樂子、君は近來俱樂部へ来てヨタる外は、流石に餘所で脱線したり、俱樂部氣附で怪しげな便りを受てウダ〜する様な事もなくサ、言葉敵が混つ返しツこはする様なもの、正直な所僕等は密かに敬服してゐたものだよ、尤も其れが年齢の故と云へば年齢の故だらうがね。」

「ところがだよ、人間の心持なんてえものは不思議なもので、其此間みんなの騒いだのを見て自分の年齢に氣が着いたと同時に、急に嫌アに淋しい氣がしてね、其れから更に亦考へたのさ。」

「なか〜手數がかゝるんだね。」

「先づ聞きたまへ、悲觀の本文はこれから入るんだ。」

「は〜ア其れから事件があるのかい。」

「大ありさ、大あり名古屋は城で持つ、俱樂部仲間は洒落で持つといふ様な元氣がすつかりくぢけちやつたといふわけだね、が柳夢子、小町は老いて嘆ずらく、面影の變らで年



の積れかしとね。』

『ウフツ、君の悲觀に小町を引張出すなあい氣味がよくない、尤も吉原のトンネルにも随分小町はあるからね……所でまアどういふわけなんだい。』

二

兎角戲作などに取扱はれる人間は、親同胞があらうとも思はれねば、亦、友達と女と洒落の外には何をして生きてゐるのか、甚だ要領を得ないわけのものが、區役所で謄本を取つて見れば、芝で生れて神田で育立と云つた工合に、世間並の戸籍があり、正に其れ其れ人の子にして、年齢相應に家族の數を列べてゐる、唯其れが不思議か當然か、其人物から考へて鳥渡解らない所が、即ち戲作の筆に紛れ込んだと云つた次第。さてそこで、稀らしく集の悪い倶楽部の夕暮、疊の酒汚點がデミ／＼する様な不景氣な雨の日、奇と言はうか妙と言はうか、最初は戲談の言葉敵の様だつたが、其れが決して然

にあらずで、言はうとする者、聽かうとする者、口癖でチヨイ／＼洒落やヨタは出る様なもの、互ひの顔つきが頗る眞面目になつて來た。

『先づ聽きたまへ、蛇穴を出れば周の天下なり——といふのが標題なんだ。』  
と茶樂は鳥渡唇を嘗め、

『よしかね、前にいふ其皆で騒いでゐるのを見た時に、イヤ見たといふより一緒になつて騒いでゐたわけなんだが、其最中に——別にキツカケもなかつたんだが、偶と自分の年齢に氣が着いたものさ、そりや何も、いくらヨタだつて自分の年齢を忘れてゐる奴はないが何かの場合で氣の着くといふ事は別だ、何しろ僕は三十をズツト通り越してゐるんだからね。』

『三十幾つだつたア。』

『氣が着いて見ると四十の方に近くなつてゐる、豈心細からざらんと欲しても心細からざるを得ざるといふものだ。』



「ハ、アざる／＼かね。」

「ウフ何だいさる／＼ツてな。」

「何だとは何だい君が頻りに其ざら／＼だのさる／＼を用ひてゐるぢやアないか。」

「アハ、言葉遣ひを立派にすると斯様なるが、これも舌が廻らないと止りがなくなるから難かしいよ、心細からざらんと欲しても心細からざるを得ざる……」

「オツと其ざる／＼の所は最早解つたよ、で其蛇穴を出る所をうかゞひたいね。」

「そこでテ……其時年齢に氣が着くと同時に、妙なものだね君等始め自分より年の下の連中が急に羨ましくなつて來たんだ、其れまでは同じ様な心持どころか、寧ろ若い氣でゐたものだがね……」

「何も今更其塵心持にならないでも、いつまでも若い氣でゐたら宜ささうなものぢやアないか。」

「ところがだ、左様氣が着くとモウ不可ない、其れ以來一緒にたつて洒落をいふのもヨク

を飛ばすのも無理から力める様になつて來るのさ。」

「左様云やア、此五六日何處となく影が薄い様にも思つたよ、然し何だね、僕等ヨク仲間でも左様氣が着くところが性は善といふものだらう。」

「性は善たア何だい、まるで悪人扱ひだ、佛の様な男だぜ。」

「アハ、佛には違ひないが久しく魔かさしてゐたといふもんだらう。」

「オツト冗言が始まると止りがなくなる……折角同情を寄せるなら慎んで／＼、そこで、莫迦々々しい様だが妙に氣がふさいで爲様がない、所謂老込むといふやつだらう、家に居ると世帯向きの事などが嫌に氣になつたりするんだが、其れも今までにあまり憶えのない事だからね、何しろ其様云つたわけぢやア俱樂部員の一人として、聊か世界が變り過ぎるといふものだ、で實は其時に考へたのさ、人間這麼ヂミ／＼して來ちゃア却つて碌な事が來ない、斯様いふ時には一番鳥渡心持を浮かせたくツちや不可ないとね……久し振で其元氣を取返さうといふんで、然も勇を揮つて孤軍奮闘、誰れにも言はずに或る所へ押出した



と思ひたまへ、倶楽部でヨタる事に於ては随分怠らなかつたが、白粉臭い國へ出掛るんならざア實際久し振だからね。」

『ウム成程そこだね、蛇穴を出づれば……といふ所は。』

『左様だよ、出掛けて見ると天下の變つてゐるのに驚いた、馴染の名を思出して招んで見れば、僕の知つてゐるのは其先々代だつたり、其當時雛妓だつたのが年増の部になつてゐたり、偶々存じ寄りの女中がゐたと思やアいゝ婆になつてゐてね、第一其いふ言が何うだい、マア暫らく貴方随分お爺さんになりましたねえと冒頭に來たんだ、ねえオイ柳夢子、總ての様子が斯様變つて、左様いふ白を、冒頭に浴せられたんだから助からないぢやアないか、第一茶屋の氣分や、他に喧いでゐる客の様子なんてえものが、同じヨタでも僕等のヨタとはヨタ振がまるつきり變つたもんだね、随分奇妙な聲をしてゐたよ、ラーララ、ヒューヒューツてんだがね、雛妓なんぞが一緒に唱つてゐるんだから呆れたよ、まア何もないが折角久し振で元氣を取返しに出掛けて行つて、其様いふ白を浴せられちやア、氣が着いて心

細がつてゐたのをハッキリと裏書されたわけだからね、くさくさするだらうぢやアないか……』

『やれくお爺さんは酷かつたなア。』

『だが其れもね、思の外老けたのを久々だけに左様仰山に言つたものなんだが、然し、雛妓は勿論、婆ア藝妓まで、呼ぶにをぢさんを以つてするのが當然になつて來たね、遊びもをぢさん扱ひになつちやア浮かれツこないや、唯もうあぢきない氣がして來たよ。』

と、調子が漸々減込んで來る、柳夢とても三十前後、やがて其様なるトバ口なれば、心細い茶樂の愚痴につれ。

『尤もだく。』

と、義太夫詞の潤み調子、ふさけていふのだが、そこに中年の悲哀といふ、眞面目に扱はねばならない様なものがある。

暢氣な人間の萎氣た程、一層哀れなものはない。



外は未だビシヨク降つてゐる、今日はとつても陰氣になる廻り合せか、他の輩の顔も見えず。

『だが何だ茶樂子、其れも、君が其方面の發展を鳥渡遠退いてゐて出掛たから殊に其様餘計に感じるのさ。』

『ウム其れも左様には違ひないが、自分の年齢に氣が着きながらも、眞面目な世間の人と比較すると俱樂部でヨタつてゐるお蔭で若い氣が失せないからね、側で見る程をぢさんにはなつてゐないつもりさ、蒸氣た心持を取返しに出掛るくらゐだから、正直の話が、行けば、未だにいさん扱ひにされる氣でゐたもんだ、所が其、對手の人間の代變り、遊び振の調子違ひ、此方は其をぢさん扱ひと來てだ、然も其上、御勘定に税が附くツてんだ其れも何も變つた天下と我慢もするが、料理の盛つけが吝つたれて、其れが二三年前の何倍といふ相場だから彌々ベラボウ臭くならうぢやないか、えゝオイ柳夢子、今日鳥渡入口に敷石でも敷いてある茶屋へ飛込んで藝妓の二三人も招んで都々逸の一つも謳はうツて事にな

ると、以前なら鳥渡したのが身受の出来る位ゐの金がかゝるんだいやく。』  
と、茶樂は吐き出す様に斯様云つて、

『何もよ、金子に糸目をつけやアしないがさ。』  
と、口惜しさに附足した。

『ハハ、苦しさに威張つたね、だが何だね、平常俱樂部でヨタツてゐながら、今時分其塵事に氣が着いて、ヂリ／＼してゐるのが、つまり時代に遅れてゐるわけでもあり、實際年齢の故でもあるといふものだ、然し亦其ヂリ／＼する所に若いほとぼりがあると云へば云へもするから、今夜邊り一番何處かへ押出して、もう一度元氣取返しに戦端を開いて見ちやア何うだい、友達一人が老込むか老込まないかの境だ、友情を厚ぼつたくしてつき合はうぜ、雨は降るし、外の顔も見えないし這塵話になつて二人ツきりでゐちやア滅込むばかりだ、どうだい。』

と、柳夢は稍若くもあるだけ、同情の序に浮かれたい氣分になり、頻りとそゝれば、



『「ア……ねえ。」』

と、茶樂は、既にくだびれた落武者と云つた身で氣が乗らず、

『弔合戦もいゝが、猶且討死になりさうだし……其れも覺悟とした所で、情ない言をいふ様だが、高いからなあ。』

と——噫、成程暢氣者も年齢なりけり、懷ろを考へて二の足を踏む！

『オット茶樂子、そこは一ツ智恵を出さうぢやないか、時節柄なり、實の話がサ、君より僕の方が聊か若いとはいふものゝ、扱ひはおぢさんの部に屬すんだから、浮かれ損ひは御用捨、兼合の藝當といふ不安はあるんだ。懷ろをひどく痛めない程度で鳥渡女の子を配して今宵の雨を陽氣にトーンとぶつけ様といふ、策戦の巧い所を考へ様……待たまへ、何處ぞ思つきな處はと……』

と、柳夢が腕を組んで、さも事々しく首をひねれば、

『左様いふ所があれば行くね。』

と、結局茶樂も、行つてもいゝ了簡、猶且そこが暢氣なのか？ 其れとも亦、そこが人間の未練な所か？

『あるよ、オツな所があるよ。』

と、柳夢が組んだ腕をほどいて、思つきの膝を打てば、

『フームン何處だい。』

と、茶樂乗出して訊くからいゝ、今泣いた鳥がモウ笑つたと子供の囁す、とんとあれあれ。

『莫迦に安くて、莫迦にオツだと先から聞いてゐるんだが、ツイそこまでは廻り切れないといふわけで、行かないでゐたけれどね、恰度いゝ思つきだ……少し遠くはあるが、そこが其れ値段と御相談で、浮かれ如來を參詣とは何うだい。』



「な、何だい浮かれ如來だつて、そんなものが何處にあるンだい。」

「ウム浮かれ如來ぢやア鳥渡解るまいが、院線の中野行といふやつで、萬世驛から約四分、終點で降りて五六丁、新井の薬師へ参詣といふ趣向なんだ。」

「何だ新井の薬師か、眼でも思らやアしましめし薬師を参詣をして何うするんだ。」  
「あれツ話の通らねえをぢさんだぜ。」

「オイ、仲間中からをぢさんは助けてくれ。」

「イヤ違えねえ、其れを慰める爲の思つきだつけなあ……何も唯薬師へ参詣に行くわけぢやアない、近來彼の境内がオツな氣分に發展してゐるといふ事を、君は風説にも知らないのかい。」

「知らなかつたね。」

「不可ない、其れだから時代遅れといふものだ、實は僕も其様なつてから行つては見ないのだが、歌人は居ながらにして名所を知り、粹士は行かずして其寸法を知るツてね、そ

りや實にお話以上に繁昌してゐるさうだよ。」

「一體何う繁昌してゐるンだい。」

「何うも恚うもないさ、藝妓の様な者がウンとゐて、以前の講中茶屋が野暮堅い氣分を離れてトーンとぶつけの我々粹な客に不自由をさせない様に行届いてゐるといふんだ、其れでその御勘定の安なる事亦現代離れと來てゐるンだから、此際行かずんばあるべからずぢやないか、何うだい。」

「お話の様子ぢやア莫迦に面白さうだが、その藝妓の様な物ツてのが氣になるア……様な物ツてのがね。」

「そこに珍味ありさ、まア何れにしても會計の安なる所で失敗しても口惜しくないからよからうぜ。」

「ウムそれも左様だが……然し實際安いかい、變な所で世間相場なんざア身に沁るからなあ。」



『イヤそこは大丈夫請合、土地から考へても安さうなわけだよ、だが何しても聊か遠征だから出掛るならサツサとしやうぜ。』

『ウン、此雨の日の暮れから中野くんだりまで出掛るなア、あんまり気が軽くないね。』  
『などいふのが老込みといふものだ、その勇氣がなくなつちやア駄目だよ、薬師如來さへ三味線の音に取巻れて、コラ〜と浮かれてゐる程發展してゐるんだ、さア〜行かう〜』と、

柳夢は彌々調子づいて急ぎ立てる、茶樂は年齢の故で少々たるむではゐるもの、抜がけの失敗にボヤボヤしてゐる所ではあり、珍な所へ飛出してお慰みになるならばと、  
『其れぢや出掛ると爲様かい。』  
と、氣は重さうにいふけれど、次第にモウ行きたくなつてゐるのなり。

此れなる俱樂部は、何だ神田の明神下の新路なれば、萬世驛へは駄洒落を二ツ三ツの丁場雨にもめげず、廣瀬中佐と杉野兵曹の銅像が、其以前の書生芝居と云つた身で氣取つて

ゐる其背中の見當から、ポーツポツと院電の中野行。

『中野まで何分かゝるんだい。』

『きまつてゐるぢやアないか。』

『きまつてゐるにやアゐるだらうが、其れが何分かゝると云ふんだよ。』

『あれ君は知らないのかい。』

『知らないから訊くんだよ。』

『五十分かゝると昔時からきまつてゐるのさ。』

『オイ〜電車の時間に昔時からとは何だい……』

と、茶樂は言ひかけたが、危い所で氣が着いたといふ様に、

『オツトツト柳夢子、洒落なんだね、ウフ解ツたよ院電僅か五十分ツてんだらう。』  
と、言はれぬ先に、あわてゝいふ。

『其通りだアハ、ハ、ハ。』



「這麼莫迦を云ひく其座時分から飛んだ所へ出掛てゆく、鳥渡常識では判断がいたし憎いが、這麼男も先刻の様に、妙に泌々考へ込む事があるとして見れば、人間それ／＼側で見程樂なものではないと見えたり。」

御役所、會社へお勤務の洋服子に依つて、朝は八時がらみ、夕は四時過ぎ、山手、郊外への往復に詰られるだけ、詰られるが、間の時間は市内電車のブラ下り程、喧嘩面の恐しさはなく、殊に今日はビショ／＼降りの日も衰れたり、廣い車内の所々に空きを見せて、頻りと喋舌合ふ二人の瓢輕振が、チヨイ／＼と乗合の視線に觸れて、面白がられたり、氣味悪がられたり、さりとしてこれが、場所もあらうに中野くんだりへ浮かれに出掛けるのだとは、唯れだつて想ひも寄らず、亦當人等にもしろ、出掛ては來た様なもの、駄洒落の間で顔見合はせ、

「然し茶樂子、考へてみると僕等のする事は奇抜だね、鳥渡凡人には計り知れないだらうテ。」

「考へてみなくつたツて奇抜だよ。」

「然し亦、雨の降る夜を新井の薬師へ行くなどは同じ脱線の方でも随分ひねつてゐるね。」

「ひねり過ぎてらア。」  
「だが此院線は市内電車と違つて、何となく旅行氣分がするから嬉しいぢやないか。」  
「など、柳夢は、同じ暢氣な中にも幾分タガのゆるみかゝつてゐる茶樂を慰め顔だから殊勝らしい。」

雨の夜ながら窓外を覗けば、神田明神の森に仁丹の廣告が紅を流し、聖堂の蓑、お茶の水、市内電車が彼方を走る、雨に軒並の電燈が滴つて夢の如に賑やかな飯田橋邊りから、牛込、市ヶ谷、四谷見附と、ペンキ畫伯の描いた様な背景を變へて、信濃町、代々木は暗い墨繪に、やがて新宿驛を出過ぎると、氣分がすつかり田舎になる。

「何だか斯様……遠くも來にけるものかなといふ感じがするね。」

と茶樂は、闇に野廣い風當り、車窓の硝子へしぶきする雨を覗いて、薄ら心細い聲で云



へば、

「偶々下町から来ると、莫迦に遠くへ来た様な氣はするがこゝら邊りから勤めに通ふ輩などは、僕等が隣り町へ行く程にも感じないのさ。」

「村から城下へ出るやつだね。」

「古い言を云ひなさんな、郊外へ家でも新築して、電車の定期券をポケットから出す様でなくつちやア當世らしくないんだよ。」

「ウム其内に郊外へ月賦で別荘でも建ててるかい。」

「左様なつて来ると、僕等の俱樂部へも球突きの臺ぐらゐは据えなけりやアなるまいといふものだね。」

「だが、何う考へても僕等と来ちやア、球突よりは玉ころがしといふ方だぜ。」

「違えねえ、嬪アは洋食の調理方を知らずね、お互ひに紳士の家庭にやア縁が遠いからなア。」

「下町の縁日で鉢植を買つて、物干へ並べて納まつてゐるやつだ、其代りこゝいらにはオツな小皿盛の立食ひもなからうし、第一朝湯があるまいぜ。」

「成程茶樂子、楊枝をつかひながら朝湯へ飛込んで、家で飯がなかつたりすりやア、屋臺の暖簾を天窓で分けて、鮪のブツ切の小皿盛と来て、鉢植を並べた屋上庭園をミシリ／＼と散歩をするてえのが、僕等の生活振ツてンだから世話アない、其儘で知らず／＼年齢を取つてゐるンだね、お互ひにまだ洋服を着た事がなかつたつな。」

「洋服を被る氣になりやア、郊外生活で堀井戸の水も飲めるンだが、漸つと此頃禪を猿股にした位の事ぢやあ、先づは一生下町は離れられないといふものだ。」

「オット喋舌つてゐるうちにモウ来たぜ、院電僅か五十分か、恰度其塵もんだね……時に雨は何うだい、少しは小降になつた様ぢやないか。」

「さア。」

と、柳夢は硝子戸をガタンと下して首を出し、



「ウム占々、小降りく。」  
と、いふうち電車の歩は停つて、

「中野、中野。」

と呼ぶ聲、未だ暮れたばかりの宵の口だが、此驛まで来た乗客はちらりほらりと數へられる程、雨の驛の寂と淋しく、浮かれに行く爲、降りた土地とは思はれず、

「オイく柳夢子、いゝのかい。」

「何がさ。」

「何がつて、薬師様が浮かれてゐる様な気分がしないぜ。」  
「まあく黙つて行つて見るべし。」

四

武藏野研究として、こゝらも風流子の踏むべき所、殊に懐かしい新緑時分ではあるけれ

ど、日和もあらうに時刻もあらうに、よし小降になつたからとて、雨の晩をピシヨくくと足駄をまげて、泥濘の暗い路を、傘をかついで、

「オイく柳夢子道を間違ひない様に行かうぜ。」

「大丈夫心得のある道だ、ソラ此左り側が中野の工兵隊さ、これに附いて真直ぐに行つて田無街道を斜めにつつ切るとわけなしたよ。」

「ウム歩いてゐると思ひ出す道だが、然し随分久し振で来たものだ、十年にもならうかね。」

「僕も暫らく振で来たんだが、田舎気分で灯影はにぶいが、す、かり軒續きになつちやつたね、此様子で見ると、薬師様のお膝元が陽氣に發展してゐるのも確かに頷つけるぜ。」

「何うだかね、停車場前を離れると漸々心細くなるんぢやあるまいか……」

「あれツ茶樂子、兎角君は悲觀の方へばかり持つてゆくな。」

「だけでもさ、今夜二人で這處所をトボくと歩かうとは思はなかつたからね、其れも僕



が年齢から愚痴になつた結果さ、元氣取返し、の弔合戦の戦場へ臨むわけでなんだが、さるにても變な所へ来たもんだ。

『ウム左様さ、變な所には違ひないね。』

と、兩人道惡に立止つて感心してゐるからい。

中野驛前を真直ぐに二丁程来て、突當りが田無街道、何となく名もさびしい、武藏野の草の繁みを想はせるが、其れは夢に見る遠い往古。

『オイ、茶菓子、漸々心細くなる所か、漸々景氣づいて来たぜ。』

『成程變つたなあ。』

と、曾て氣憶の跡形もなく、商賣店の明るい家並、牛肉の切賣屋が庖丁をこすつて、ハイカラの奥様が風呂敷を持つて立つてゐるなんといふ光景。

『何うだい、田無街道といふ氣分ぢやなからう。』

『うむ、彼の奥様がローズを一圓か何か買つて、お勤務から歸つた且那樣に、テキでも調

理て食べさせ様といふ寸法などに、イヤ開けたものだ、これぢや實際、藥師の近所へ来た甲斐があるかも知れないね。』

『左様だともく。』

其通り筋を藥師道へ入ると、凝つた家造りの鰻店の門からパタ／＼とお誂への音、西洋料理、自動車屋と行届き、其邊りからどこともなく、所謂オツな氣分が漂つて来る。

『有望々々、何と茶菓子聞き及んだヨリ以上らしいぜ。』

『まつたく来ては見るものだね。』

『これも蛇穴を出てオヤ／＼と来た一件だらう。』

『イヤ其事だ、斯様まで天下が變つたとは思はなかつたよ……だがね柳夢子、變つた世界に驚くと同時に、亦此方も變つた扱ひをされるのが思ひやられて来るよ。』

『オツト其れを此際思ひつこなし、自分からヒケてゐるから不可ないんだよ、折角此所まで出掛て来た若い氣を意氣地なくぐぢきなこんな、何れにしたつて艶ぼくウダ／＼遊ばう



といふ様な氣味の悪い了簡ぢやアなし、陽氣に浮かれりやア氣が済むんだらう。」

『無論さ、がそこが鳥渡難かしい所だテ、艶つぼくモテ様といふだいそれた氣は我々俱樂部の規則としてもなし、亦中興の祖たる八笑人以來、家柄にないんだが、さりとお爺さんだのをぢさんと來ると忽ち浮かれ憎くなつて來るからね、まさか坊ちゃんとも言ひ憎からうが、そこに幾分の艶氣は必要だ、變に考へさせられる様な言を云はれると、遊びにスキ切れが出来て來るからね。』

『イヤ成程、茶樂子君は年齢の故の方に本人を壓迫されてゐる型だね、然し其れにしても神經が些こぢれ過ぎてゐるよ、そらく愈々目的地へ到着したぜ。』

と、キヨロくと視廻せば、藥師門前への曲り角に、二階座敷の高欄を折廻し、門から見込んだ庭も廣々、氣取た文字で御料理『辰巳野』とあり、滿更でもない女中の顔も覗かれれば、三味線の音、御機嫌らしい客の聲。

『却々立派な料理店があるんだね、朱引内でも這麼大きな樓は鳥渡無いね。』

『そりや當然だアね、地代と相談だ。』

『へッ地代の方に考へるなんざあ、何うしても、茶樂子年齢だなあ。』

『こゝいらで坪幾千位ゐるだらう。』

『オイ、不可ないよ、野暮なことばかり言ひ出すぜ、地代で氣を揉みに來たわけぢやアないよ。』

『妙に道塵言を云へちまふから爲様がない、あゝ我れながら焦れツたい……』

『茶屋の前で三味線の音を聴きながら地代の事を考へる様ぢやア元氣を取返し憎いぜ。』

『ウム考へた所で地面が買へるわけでもないんだが。と、云つて賣るのを持分はせてとるわけぢやアなし、身上の軽い所がお互ひの生命といふものだ、ムダに眞面目になりなさんな、つき合ひ憎くならない様にお頼み申しますよ。』

『あいよ。』

其「辰巳野」の角を左りへ突當りが、子育と眼病に靈驗いやちことある新井の藥師、山



門傍に「萬屋」其れと相對つて「角屋」と、何れも以前の講中茶屋だが、店口へ草鞋で掛る參詣客の中食に藥師如來の御利益を語り合ふ、といふ様な古い田舎の流行佛といふ懐しい感じも名残つてゐるが、其様した店口の隣りには其れ／＼庭から入る別座敷を控へて、土地發展の陽氣な舞臺、殆んど間旬に三味線の音が聞こえる、此雨の夜を莫迦な景氣。

「ウームン驚いたなア、どの樓も三味線の音のしない所がないね、何處から客が來るのか知らないが、え茶樂子、これぢや藥師如來も浮かれさうな事だ。」

「イヤ實際不思議に發展したものだね、彼の三味線の主が、君の所謂藝妓の様な物つてんだね、イヨウ彼の二階で踊つてゐる奴があるぜ。」

と、茶樂子も其チヨイ／＼出て來る年齢の故を忘れた様に、浮いた氣分に誘はれて來た。

「柳夢子、どの樓へか入つて見様。」

「ウム其事だ、時にお參詣はいゝかい。」

「何うせ藥師様も戸を締めて、人知れず姿を變へてそこからで浮かれてゐるだらう、門前で失

敬しちまうぜ。」

「ウフツ茶樂子大分元氣づいて來たね、猶且頼母しい道樂者だ、勇士は響の音に目を覺し粹子は三味線の音に武者振ひと來た、入らう／＼。」

と、兩人、其「萬屋」の門を入れば、

「いらつしやい。」

と、印半纏のいなつこい若い衆、下足札の紐をぬきながら、

「御宴會のお連様ですか。」

と、忙がしさりな顔で訊く。

「ウンニヤさにあらずだ。」

と、柳夢が云へば、若い衆は四角に刈上げた頭髮を搔きながら、

「相濟ませんが今晚はお座敷が充滿で。」

と、氣の毒さうに、而して亦景氣を利かせて云つたもの。



「オーヤオヤ。」  
 「柳夢子、彌々魂消たもんです。」  
 と、兩人鳥渡未練らしく、庭口に佇つたまゝ、下座敷から二階の様子を視上げれば、成程廊下を樓姉等が忙がしさうなゆき通ひ、拍手、三味線、笑ひ聲、ゴチャ／＼と其賑やかなこと。

「是非ない次第で他家にしやう。」

「實は新井ぢやア「萬屋」に限るツてンで来たんだがね。」

たゞ、氣持たせを云つて其門を出で、斷られたのを見てゐる相對ひの樓へ入るのも氣まづいわけだが、そこはフリの客だけ氣遣ひなしに、直ぐ其前の「角屋」の門から——這度は此方から注意をして、

「お座敷はありますかね。」  
 と、訊けば、

「何卒お昇りを。」

と、此樓もなかく下足の數は並んでゐるが「萬屋」ほどにはゴクつかず、先づは兩人共二階の客となる。

お粗末なチャブ臺に、ざつとした座布團、唯講中札で差した様な蓑盆が、藥師の茶屋といふ古い氣分、献立の板に一々値段をこくめに書込んで、其亦安い事、口取が一番お職で金八十錢とある。

「何うだい茶樂子此れを御覽……これぢやア浮かれ損つても愚痴にはならないよ。」

と、柳夢が云へば、

「ウムなる程。」

と、茶樂は値段附けを覗き込んで、

「安いなア。」



## 五

よし高いには驚いても、安いに驚く柄ではないが、牛肉店の女中でもお酌と来れば、先づ一圓が普通相場とある當節柄、お口取が八十錢で、然も其れが直段附のお職とあつては外に三品四品並べても精々三圓がとこ、若夫れ一品儉約して電車賃とすれば、車窓から覗く郊外の眺め、烏渡旅行気分も込めて其れで済むといふもの、兩人顔を見合はせて、頻りと安がるのも、敢てきいたふうではない。

『時に姐さん、四邊八方三味線の音で取巻いてゐるが、彼れは此土地の藝妓衆といふわけのものかね。』

と、柳夢が訊けば、土地柄に稀らしい様な溫和しやかな若い女中は、何となく態度の違つた客振と感じた様な顔附で、

『藝妓つてわけぢやございませぬけれど……』

と、前垂を撫でながら、

『まア藝妓みたいなのでございますわね。』

と、いふ。

『成程みたいなものか、柳夢子早速招んで貰はふぢやないか。』

『言ふにや及ぶだ……されば姐さん二人ばかり招んで貰はふ、で何かい、まさか其みtainなもの、と稱ぶわけでもなからうが、其代物の名を何といふんだね。』

『お師匠さんと申しますの。』

『ウムお師匠さんかそいつアい、氣に入つたね茶樂子、お師匠さんはオツぢやアないか烏渡昔時の江戸氣分だ、横丁の師匠を呼びにやつて騒がうつてやつだね。』

『違えねえ、江戸が郊外へ来て生き残つてゐたといふものかね……其れで何かい姐さん、御纏頭などは何ういふ事になつてゐるんだい。』  
と、茶樂が訊く。



『一時間一圓でござりますの。』

『フーム外に何にも要らずにか……其れで彼の近所合壁で騒いでゐる様に陽氣にやるんだね、彌々お安いわけのものだ……ちやマア何しろ早く招んでお目にかゝりたいね。』

『然し姐さん、幾人ゐるか知らないが、客は見られる通り、随分成金振を發揮しさうなんだから、其つもりで性の好い所を頼みたいね。』

『ウフツ云つたね柳夢子、成金振を發揮するやつが、御纏頭から訊いてかゝりやア世話アないアハ、ハ、ハ、ハ。』

『大きにね、先づ口取の八十錢で嬉しがつたんだからなアハ、ハ、ハ、ハ。』

と女中は、未だお客の質は解らないが、何となく飄軽な調子に、世辭笑ひでなくをかしさうに笑つて、

『では二人お招びなさいますか……少々お待ちを。』

と女中は降りて行つたが、程もなく引返して、

『あのウおお客様、誠にお氣の毒様でございますが、今晚は宴會が方々にありますので悉皆出拂つてゐるのでございます。』

『えツナニ出拂ひだつて、ぢよ、ぢよ、冗談ぢやアないぜ、オイ、柳夢子何うしてくれらんだい。』

『ウムンそいつア残念だな、何も茶樂子僕に怒つたつて爲様がないや……え、姐さん何うにかたらないのかい、實はね此連れの人が、長ら氣鬱病に罹つてねクヨクヨしてゐるのを慰める爲に連れて來たんだよ。』

『は、左様でございますか……お氣の毒様で……』

『チョツ柳夢子くだらない言をいふなよ。』

『くだらなアカないよ……ねえ姐さん、といふわけなんだから、何とか心配して貰へまいかね。』



と、柳夢が坐り直してせがむ様に云へば、

「左様でございますねえ。」

と、此女中何處までも神妙に、鳥渡首を傾けてゐたが、

「其れでは、今他のお座敷へ出るのが二人階下に參つてゐるのでございますが、其方のお客様が未だお揃ひにならないので待つて居りますから……其れを鳥渡訊いて見ませうか。」

と、溫和しいがなか／＼頭腦を働かせる。

「イヨウ感心、何と茶樂子氣の利いた姐さんぢやアないか。」

「本當によ、僕がモウ一昔若ければ……と云つちやア又年齢の故の愚痴になるが。」

「オツト其言葉は封じ様……其れでは姐さん、其お客の揃ふまでといふ所で、待つてゐる間だけは是非融通をして貰はふ。」

「は、畏まりました、チョツトの間なら宜しうございませう。」

「頼むよ／＼。」

「何卒藥師様の御利益を持ちまして、其お師匠さん方の參ります様に。」

「オホ、／＼。」

と、女中はトボケたお喋舌に笑ひながら、再び降りて行つたが、やがて戻つて、

「宜しいさうでございます。」

と、いふ。

「イヤそいつア有難い、其れで什麼のが來るンだい。」

「まさか喰ひつく様なのぢやアなからうね。」

「オホ、其塵のぢやございせんわ、メ吉に竹松ツてなか／＼好いお師匠さんなのですわ。」

「オヤ／＼其塵名前があるのかい、メ吉と竹松なんざア藝妓と變らないね。」

「そこが即ちみたいなものものたる所だらう、其様なつたら姐さんお銚子を熱くして持つて來ておくれ。」



旅いろしもお

「はア。」

と、女中の起つのと入替りに、

「今晚はツ。」

と、ものに驚かない調子で、三味線を引提げて入つて来たのは、お白粉ツ氣のない三十五六といふ大年増・襟附の縞物で、根の下つた銀杏返し、續いて後のは稍若く、同じ襟附の藍ッぽい何とかお召とでもいふのだらう唐棧柄の意氣がつた帯か何かで、頗る納まつた瘦ギス、成程藝妓見たいには相違ないが、これで揃ひの手拭ひを襟に結べば、お花見へ行くお師匠さんに相違なし。

「イヨウこれは信心の効があつて、有難くも御來臨。」

「早速ながらトーンとぶつけて頂くかね。」

「然しながら、なア茶菓子・斯かる所に斯くの如き、結構な御ン代物がお在まさうとは御勿體ない事で。」

「實際だ、昨今新橋柳橋がヒツソリして、こゝらの茶屋が此の全盛道場なりける次第だね。」

と、茲に兩人弔合戦の煙火を上げる氣で、喋舌かゝる、何がさて、ヨ夕に於ては稀代の業者であり、年輩も此お師匠さん等よりモウ少し數を越たりとあれば、對手の方がタダチの體で、

「何か伺ひませう。」

など、三味線は取上げたものゝ、お師匠さん兩人、嫌に扱ひ憎い客だと云つた顔。

「さア〜聴かせたり〜。」

「時廻びる程不覺の基、聞きわけないツと叱られて……」

と、柳夢は太十と、洒落れば、

「イヨ待つてました。」

と、調子を合はせる、即ちこれ藝妓みたいな五目の師匠、

師薬れか浮



「いとしい夫が討死の、首途の物の具付けるのが、どう急がるゝものぞいの……」  
 と、柳夢が怪しげな聲で語り出したので、お師匠さんも、漸々扱ひが樂になり、達者に三味線をかき廻し、其れから、相互ひに知つてゐるだけの音曲の總まくり、外の座敷の騒ぎに負けず、ア、コラ、ドッコイと茶樂は年齢の故の心細さをお蔭様で、さらりと忘れて了つたり。

時に、お師匠さん先約の客が揃つたとあり、

「其れでは又招んで頂だいよ。」

「其内に此土地も藝妓の鑑札が下るんですから。」

と、やがて藝妓たるの將來をほのめかして引退がる——後に兩人僅の間だが隙なしの大騒ぎに、快い疲びれのガツカリした顔を見合はせ、

「何うだい茶樂子、面白く騒いだね。」

「ウム、いゝ所が見つかつたなあ。」

と、さて女中を呼んで勘定となつて見れば、此騒ぎをした合計が東京ならば、鳥渡氣取つた夕飯程の事。

「柳夢子チヨイ、來やうぜ。」

「アハ、茶樂子、莫迦な氣に入りだね……これで友達一人老込ませずに濟んだといふものだ。」

「お蔭様〜。」

すつかり元氣を取返して外へ出れば、茶屋々々の騒ぎはさらに一層。

彼方の二階で、何とやらしてノエ。此方の座敷で、ヨイ、デツカンシヨと、嬉々快々の大繁昌、藥師様もさぞお浮かれな事だらう。



安全 第一 稻毛の波

彼れだけ伶俐な男で、實際彼れだけは不思議だよ……といふ人等にもしろ、其れく、惱ませる隠藝の、一ツ位ひは持合はせてゐるのだが、然し其中で特に問題にされてゐる花野由雄クンの踊りなるものは、惱ませ番付の観進元といふべきものだ。

と其れからもう一ツ、此花野クンの奥サンの、おやきもちといふものは、郎君の踊りの有名なる其れより以上に鳴響いてゐるのだから、其友人間に於ける噂の花形、人氣の中心となるべきわけだ。

踊りとやきもちでは格別關係は離れてゐる様ではあるが、其れが決して左様でないのだから頗る面倒なのだ。

何故ならばだ、花野クンは時めく會社で若手の利け者、重役に準ずる勢ひを持つてゐるといふのだから、仕事の上から、交際の上から、退けの俵を無事に家へ向けてばかり走らせるといふ事は、なかく世間がゆるさない、勿論彼れは伶俐な男なのだから、機に應じて變、體を交して逃出す事にも如才はないが、然し、一週に一度や二度は逃れ難く、花野を假名で書いた名頭のは、一さんと稱ばれる巷へ、立廻らざるを得ない事になつちまふのだつた。

なつた以上は、何の因果か彼れは踊りたいのである、よし亦、場合に依つて彼れが其踊りたい踊りを熟つと我漫をしても、然し有名な踊りを側が踊らせずには置かないのだ、言ふまでもない踊り出せば誰れ一人惱まぬ者はないのであるが、そこに皮肉な興味と而して交際の世辭があるから、彼れと同席する限りの者は、彼れがムヅクする態度を決して見逃しつこはない。

『花野クン、一ツ願はふかね。』



『イヨ待つてましたッ。』

と誰れか、ら浴せかける、尤も左様浴せかける何れもが亦其れぐに、お經の如な諷ひ怪しげな清元、變な長唄など、持前の所を出したい爲もあるのだが、然しである、彼れが一度踊り出した以上はなかく一ツや二ツでは止めないのである、實に彼れは倒れて後に止むのである。

遂に同席の者の隠し藝の出し場は無くなるのであるが、亦左様なると彼れが踊りに更かして歸宅の遅くなるのを、何れもは面白がるのである、奥サンのやきもちを密かに想ひやつてうれしがるのである。

茲に於て、踊りとやきもちが大關係を出す所となるのだ、然し踊り出した以上、次第に眼の色の變つて來る程の彼れは、家の事など頓着してゐない、からもう夢中になつちまふのだ。

彼れは俵にかつぎ乗せられて、踊り疲れてグツタリと死んだ様になつて家へ歸る、其玄

關へ梶棒の突くと同時に俵夫の呼ぶ、

『お歸りッ。』

の聲を聞くと共、恰かも佛へ魔がさしたとでもいふ様に、忽ちシャツキリとして、奥サンの物凄い顔が眼中に浮かむ、而して彼れの舌は酔ひにもつれてはゐるが、必らず、

『奥サンは。』

と出迎へた女中に訊くのである。其時の女中の答へに、吉と凶の二つがある。

『御寝なつてございます。』

と單に斯様いふだけの時は、先づ吉であるのだが、

『お頭痛が遊ばすさうで……。』

と來ると凶である。

彼れが其れ程有名なる踊りは、奥サンたる者の知らぬ筈がない、知つてはゐるが、まさかにかに家で踊つて見せるわけもないから、奥サンついぞ見た事がない、其れを見ずして其有



名である事のみを知つてゐるのであるから、其踊りは頗る非常の妙技であるに相違ないと信じ切つてゐる、信じ切つてゐるからには彼れが宴席に踊る時、如何にヤンヤと喝采される事かを想像するのである、如何に藝妓等にモテる事かを想像するのである、これがやきもちやきに非ずともやかざるを得ないではあるまいか、其れがその有名なるやきもちやきであるから堪つたわけのものではないわけだ。

一座を惱ませ、皆ごろしにして倒れるまで踊るが故に遅くなるのだとは絶対に想つてゐない、踊りが巧いので藝妓に口説かれてデレ／＼してゐるに相違ないと、左様絶対に信じてゐるのだ。

其れはまつたく、彼れは會社での利け者であり、伶俐者であり、烏渡好男子であるのだから、モテさうに想はれるのであるけれども、其踊りあるが爲に、藝妓等は驚き呆されて老妓はウンザリし、若い妓は震へ上るのである。とは奥サンは知らない。

半分は銀行へ、残る半分の、奥サンの三越と、家庭慰安の清遊と、其れから忘年会費といふ事にした、花野由雄クンの後半期のボーナスなるものは、烏渡此不景氣にしては餘りあるものだった。

以上ボーナス處分の内、家庭慰安と云つても、花野夫婦未だ兒がないので、要するに奥サンの三越のお誂への出来上るのを待つて、二人で何處かへ出掛るといふ筋なのだ。

『おまえ何處へ行きたい。』

『左様ですわねえ、箱根はモウ寒うございませうね。』

『寒くツても湯があるからいゝ様なものゝおまえ度々行つてゐるから、それよりは變つた所がいゝだらう。』

『そりや左様ねえ、冬は却つて海濱がよござんすわね……でも、鎌倉や逗子は知つてます



し、房州も行きまししたし、と云つてあんまり遠い所ぢや乗る方が長くつて、彼方へ行つて悠然出来ないから詰りませぬわねえ。」

「あゝ左様々々おまえ未だ稲毛へ行つた事がなかつたらう。」

「えゝ、知りませぬわ、ですけれども稲毛ぢやあんまり近過ぎるぢやありませんか。」

「だつて稲毛で一晚泊りなら随分悠然出来るぢやないか、知らないとすれば一度は行つて見て好い所だよ。」

「そりや左様ですわねえ、稲毛ツて其處に好い所ですよ。」

「其處にツて程の所でもないが、海に面した小高い所でね、明るい感じのする所だよ、其れにね其海の見晴しばかりでなく、其脊後の松林が實に好いんだ、鳥渡東京に近い所ぢやア彼の位ひの松林は外にないね。」

「ぢや稲毛にしませうか。」

「左様おしな。」

「えゝ左様決めませう。」

と決める所へ三越の馬車が、お誂への紙包を届けて來るといふ寸法、此所莫迦な家庭圓滿で、流石の奥サン持合はせのやきもちを持出して焼き様もない。

「其れぢや明日の午後から出掛やう。」

「えゝ。」

と奥サンお誂への紙包をほどきながら、

「まア貴郎見て頂だいよ。」

と云へば、

「あいよ〜。」

とばかり、萬々こゝまではよかつたが、其晩が郎君の忘年會なのである。大いに踊るべき時なのである。即ち一年の踊り納めなのである。

然しまア〜今の場合は、明日出掛るといふ約束と、お誂への出來立てとで、奥サン



同じヒステリックでも陽の方になつてゐる。

「貴郎今晚忘年会でしたわね。」

「あゝ交際で是非がない。」

「會社のお交際も却々大抵ぢやございませぬわねえ。」

などゝ其出來のいゝ事。

「まつたくだよ。」

と郎君、まつたく迷惑だといふ様な顔をしたが、密かに腹の内では、此調子なら今夜は充分に踊れるなど、喜んだものだ。

三

舊式で云へば無禮講、時節柄では猶更階級で席順を決める様な事はないが、然し其れでも、社長重役と云つた輩が斜にかまへてゐると、一座の膝がなか／＼崩れず、暫時は禮に

始まつたまゝ亂に入らず、隠し藝がムヅ／＼とわだかまつてゐたが、そこは氣を利かして社長重役といふ所は、やがての事に消えてなくなる、さアそれからだと、先づ盃が空中を飛ぶに始まり早速に亂に入る。

「さア伺ひませう。」

と藝妓が三味線を抱へて其れ／＼の前へ膝詰と来る。

花野由雄クンは、今夜は誰れに云はれずとも、踊るべく勇むで來たのだ。

「諸君今夜は大いに踊るよ。」

と立上つたものだ。

「ヨウ／＼始まるぞ。」

「さア大變。」

などゝ密かに恐れを爲しながら顔を見合はせる者もあり、亦自分等の隠し藝の出し場を例に依つて一氣にヘン折られ、情けない顔をした者もあつたが、彼れが重役に準ずる椅子



の重みは、自然一座から一目置かれる所もあり、亦其珍なる手振り妙なる腰つきの御愛嬌を受ける所もあるので、

「イヨ一待つてましたッ。」

「大統領ッ。」

「充分に願ひます。」

「家元ころしッ。」

「奥サンが心配しますアす。」

など、八方から、種々な聲で云ひたい言を、褒る様な工合にいふ、然し常人、茲に踊るとなつては、人のいふ言などは耳に入らない、先づ耳が遠くなり、眼が据はるのである。

「ねえ君、彼の才子にして實に彼れだけは不思議だね。」

「まつたくだ、花野クンにして彼れさへなければ批點のない男だがなあ。」

と、其れも必らず出る囁やきだが、亦今更にそちこちで繰返される。

古言に曰く、踊る阿呆に踊らぬ阿呆、とても死ぬなら踊らにや損だ——といふのがあつた、其れは何も踊りのみを云つた言ではあるまいが、何れにしても短かい人間の一生お陽氣に暗らした方が徳だといふ意だらう、であつて見れば踊りたい者は踊る方がいゝ、殊に安席に列つて、唯無暗に飲むで矢鱈に喰つてばかりゐるのも色消しであり興がない、が、然しながらである、花野クンの如く踊るのも聊か考へ物だ、イヤ聊かではない大いに考へ物だ。

よ！巧くつても素人の巧いのは玄人の拙いのとつツから、寧ろ拙いのが旦那藝の値打であり、座興に端唄物の一ツ二ツは愛嬌なものである、ところが此花野クンの踊りなるものは、決して短かい端唄などで納まつてゐないのだ。

「北州」の後が「保名」それから「山姥」次ぎが「道成寺」など、來るんだ、然も旦那藝過ぎる珍型といふのだから、地方の藝妓も、見物の一座も、先づ最初の一ツだけは、悪く澄まし込んで踊り出す其珍なる所に依つて、密かに横腹を抱へて可笑涙に喝采も博すのだ



が、二ツ三ツと數を重ねられて來ては、我漫がしきれなくなるのである。  
尤も其れに慣れてゐる輩は、一々正直に見てはゐず、亦見てゐた所で、當人は唯モウ夢中、人々の顔などは眼に入つてはゐないのだから氣兼ねない、其れも小人數の場合だと左様はゆかないが、其夜の忘年會の如き大一座となれば、踊りの方を遙かに避けて、亦其れくゝの隠し藝に取懸れもするのだツた。

唯此際氣の毒なのは、其踊りの地方に捉まつた藝妓等である、彼れが倒れてへたばるかお時間の來るまでは息もつけないのだ。

其れも其れに慣れてゐる馴染の藝妓等は、其覺悟をしてかゝるから未だしもだが、其夜地方に廻つた一人の若い藝妓の羽根子といふのは、初めて此踊りにぶつかつたので、其踊りの番數の重なる程に漸々ベソをかいて、遂には涙泣むで來たのである、若い妓だけに唄の方に廻つてゐるのだが、豫め覺悟してヤケな調子で弾き捲くる姐さんの三味線に煽られるのだから、實際堪つたわけのものぢやアない。

然も其夜、羽根子の家へは新出來の旦那が來るのである、唄つてゐる中に、其來る時間が迫り、やがて通り越し、遂に旦那が焦々して待つてゐる時間となつて來たのである。  
時に夢中の踊り手は、雛妓の手拭を借り、口に咬へて屁放腰をし、今『道成寺』の半に及んでゐるのだ。

「誰れに見しよとて、紅かねつきよぞ……」  
と唄ふ時、羽根子はホロ／＼と涙が溢れた。

四

恰度寄席で下手な眞打が出てゐる時の様に、列席の人々はポツリ／＼と退却して、隅の方で酒癖の悪いのが蒼白になつて怒つてゐると、踊つてゐる花野クンと、地方に廻つてゐる藝妓等と、其れから幹事役の二三人が是非なく残つてゐるばかりで、茶屋の廣間は疊の方が目立つて來た。



時に漸つと、

『もうお時間でございますから。』

と樓婢が幹事さんに鳴物の停止時間を報じたので、藝妓等は吻としたが、花野クンは宜い気なもので、

『オヤもう其座時間かい。』

と残念さうな顔をしたものだ、然し残念さうとはいふものゝ、さんざ飲んでの上、五體の動搖凄まじきばかりに踊り切たのだから、酔は脳天にのぼり、息はセイノ、顔の色は蒼く、藝妓の三味線の片附られる時分は、ヘト／＼になつて其所に打倒れて了つた、而してウン／＼唸りながら、

『オイ、誰れか、便所へ連れてツてくれ。』

と云ふ始末だ、何の因果か其時未だ側にゐた羽根子は、知らん顔に逃もならず、  
「貴客便所ですか。」

と八を寄せながらも抱へ起せば、ヒヨロ／＼と起上つて、二歩三歩行つては亦ヘタ／＼と倒れる、見兼ねて幹事役が手傳つてヨツシヨイ／＼と便所へ運んだまではいゝが、抱へてゐなければ用を達せない程疲れかへつてゐるのだ。

然りと雖も、踊りは未だ彼れの頭腦から離れてゐない、息をセイ／＼云はせながらも、

『 TENTOTTツテン、 TENTOTTツテン、 煩惱菩提の、 檀木町より……。』

など、道成寺の鞠唄か何かやりながら、變な手つきをしてゐる。

幹事役は扱ひに惱んで、困つた顔を見合はせて、

『ねえ君、とてもこれぢや大將一人では歸せないね、酒も踊りもヨリ以上にメートルを上げ過ぎてゐるんだから堪らない。』

『ウーム弱つたなア、何しても此儘自動車の中へ放り込み憎いね、どこか此樓の小さい座敷を借りて三十分ばかり寐ませるとい、んだな、而して少し落着いた所で自動車へ乗せて歸さうぢやアないか。』



『左様だなア、左様するより詮方がないなア。』

と幹事等が斯様云つた相談をしてゐると、側に情けない顔をして立つてゐる羽根子は哀れツぽい聲を出して、

『俺、頂いて歸つてもよござんすか。』

とホト／＼した顔で乞ふ様にいふ。

『イヤ羽根ちゃん御苦勞々々々。』

『酷い目に遇つたなア。』

と流石幹事だけに同情して云へば、羽根子亦ウラ悲しくなつてホロリとしてゐる、泌々踊りが身に堪へたと見える。

時に便所から兩腕を抱へられて、フラフラと出た花野クン、亦廊下でパツタリ、まるで吐血で死んだ型で打倒れて了つたが、其れでも未だ、

『テントツテン、テントツテン。』

と、喘ぎ／＼やつてゐる。

廊下にへたばつたのを小座敷へかつぎ込んで、働き疲れの樓婢等に氣骨を折つて頼むだり、幹事等又愚痴たら／＼、而して漸やく小一時間の後、幾分熱の醒た花野クンを自動車に乗せちまつた。

酔つてゐる事は勿論だが、然し酔ひよりも踊りで逆上てゐる方がヨリ以上なのだから、暮の夜更の大路をゆく、自動車の窓から吹込む冷つこい風をうけて、漸次に逆上が下つて来ると、酔ひもそろ／＼醒て来て、家の見當の着かない様な事はない、家へ漸々近くなると思ふと共にだ、四邊寂とした其遅さ加減に心着き、而して奥サンの顔つきが、鼻の先へ浮かむで来るのだつた。

三越からお誂への出来上り、翌日の稻毛行きといふ、低氣壓を北日本海の方へ反らす備へはあるのだが、然し其れにしても少し遅過ぎたのだつた。

『オイ其處でいゝよ。』



と自動車<sup>じどうしゃ</sup>を止め、戸<sup>と</sup>締<sup>ぢ</sup>りのした玄關<sup>げんかん</sup>先<sup>さき</sup>へ降りたが、茲<sup>こゝ</sup>に於<sup>お</sup>て後悔<sup>こうかい</sup> 心<sup>こころ</sup>が隠<sup>か</sup>かでないのだ、送<sup>おく</sup>つて來<sup>き</sup>た自動車<sup>じどうしゃ</sup>の警笛<sup>けいてき</sup>が、遠<sup>とほ</sup>く去<sup>さ</sup>るのを、妙<sup>めつ</sup>に身<sup>み</sup>に沁<sup>しみ</sup>る様に聽<sup>き</sup>きながら、我家<sup>わがや</sup>の門<sup>かど</sup>を遠慮<sup>えんりよ</sup>してトン／＼、

「オイ／＼、明<sup>あ</sup>けてくれ、俺<sup>おれ</sup>だよ／＼。」

と叩<sup>たた</sup>いたが、なか／＼以<sup>もつ</sup>て答<sup>こた</sup>へがなう。

「オヤこいつは不可<sup>い</sup>かないぞ。」

と思<sup>おも</sup>はず呟<sup>つぶや</sup>く、不安<sup>ふあん</sup>！不安<sup>ふあん</sup>！

五

厭<sup>いや</sup>に心細<sup>こころこぼ</sup>い支那<sup>しな</sup>蕎麥<sup>そば</sup>の喇叭<sup>らっぱ</sup>が、隣<sup>とな</sup>り町<sup>まち</sup>の方<sup>ほう</sup>を流<sup>なが</sup>してゆく。トン／＼／＼、

「俺<sup>おれ</sup>だよ、明<sup>あ</sup>けてくれ、コレツ明<sup>あ</sup>けないかツ。」  
と鳥渡<sup>ちよつとりき</sup>力<sup>りき</sup>んでは見<sup>み</sup>るが、夜<sup>よ</sup>は深<sup>しん</sup>々と更<sup>ふ</sup>けわたつてゐる。叩<sup>たた</sup>きながら近<sup>きん</sup>所<sup>じよ</sup>へ氣<sup>き</sup>がさすし、

焦<sup>ち</sup>れつたくもなつて來<sup>く</sup>る。

「オイツ、お芳<sup>よし</sup>ツ、お久<sup>ひさ</sup>ツ、元子<sup>もとこ</sup>ツ、コレオイツ。」

と、女<sup>ぢよ</sup>中<sup>ちゆう</sup>、小女<sup>こをんな</sup>、奥<sup>おく</sup>サンの名<sup>な</sup>を呼<sup>よ</sup>んで、思<sup>おも</sup>切<sup>ひき</sup>つてトン／＼／＼、撲<sup>な</sup>るが如<sup>ごと</sup>く叩<sup>たた</sup>くと、二

三<sup>けん</sup>軒<sup>せん</sup>先<sup>さき</sup>の家<sup>うち</sup>で戸<sup>と</sup>惑<sup>まど</sup>ひしたのが、ガタ／＼と戸<sup>と</sup>を明<sup>あ</sup>けて鳥渡<sup>ちよつとりき</sup>顔<sup>かほ</sup>を出<sup>だ</sup>したらしく、舌<sup>した</sup>打<sup>うち</sup>をして

ガタンと閉<sup>た</sup>てる音<sup>おと</sup>。

——斯<sup>か</sup>様<sup>やう</sup>いふ時<sup>とき</sup>は、必<sup>かな</sup>らず奥<sup>おく</sup>サン元子<sup>もとこ</sup>は奥<sup>おく</sup>でマヂ／＼と起<sup>お</sup>きてゐるのである。

「弱<sup>よわ</sup>つたなア。」

斯<sup>か</sup>様<sup>やう</sup>なるとまるで主<sup>あ</sup>人<sup>にん</sup>の態<sup>たい</sup>はなく、ドラ息<sup>いき</sup>子<sup>こ</sup>か、お店<sup>たな</sup>者<sup>もの</sup>が忍<sup>しの</sup>び遊<sup>あそ</sup>びから歸<sup>かへ</sup>つた様に、どこからか、巧<sup>たくま</sup>く家<sup>うち</sup>へ入<sup>はい</sup>れる所<sup>ところ</sup>はないかと、表<sup>おも</sup>庭<sup>てい</sup>の塀<sup>へい</sup>の上<sup>うへ</sup>を見<sup>み</sup>上げたり、泥<sup>どろ</sup>棒<sup>ぼう</sup>の様<sup>やう</sup>な工<sup>く</sup>風<sup>ふう</sup>さへして見<sup>み</sup>るのだ。

噫<sup>あゝ</sup>！實<sup>じつ</sup>に、踊<sup>おど</sup>りとやきもちの關<sup>くわん</sup>係<sup>けい</sup>は茲<sup>こゝ</sup>に於<sup>お</sup>て容<sup>よう</sup>易<sup>い</sup>ならぬものである。

俗<sup>ぞく</sup>諺<sup>げん</sup>子<sup>し</sup>曰<sup>いは</sup>く、「夜<sup>よ</sup>更<sup>ま</sup>て由<sup>よし</sup>さん茶<sup>ちや</sup>屋<sup>や</sup>歸<sup>かへ</sup>り、明<sup>あ</sup>けてといふたら明<sup>あ</sup>けてんか、家<sup>うち</sup>ではお婢<sup>めかけ</sup>がふく



れ面……」

と、なるほどよく出来た唄だと感じざるを得ない、然し考へて見ると、これが事實として二次會にダラケたわけではなく、内容は單に踊りあるのみなんだから、これ程莫迦々々しい語はない。

何しろ、酔醒の寒さ、踊り醒の哀愁、我が家ながら自由に明かない事になつては、閉口頓首情けない至りだ、然し考へてゐたつて爲方がない、女中等の起きるまで叩くの外はないのだ、間違つて他家で起き様とも氣兼ねしてゐる場合ではない。

「オイ俺だよ、明けないか。」

と或いは大きくトン／＼、或いは小さくコト／＼、叩く事約廿分もかゝつたらうか、奥の方で、黄色く疝走つた奥サンの聲が聞こへる。

「コレ芳や、芳やツ、旦那様がお歸りの様だよ、芳やツ。」  
と女中を起してゐる。

『は、はい。』

と漸と女中も起き出した——正に奥サンの御氣色は容易でないが、何が何でも家へ入れる事の出来るので、大將ホーツと大息をする。

寢呆て間違々々する事宜しくあつて、立關の戸が明き、

『お歸り遊ばせ。』

と、細帯の女中の寢みだれ、寢呆切つた聲で迎へる。

女中を起した今の聲で、御氣色の程は窺ひ知れてゐるが、

『奥サンは。』

と例に依つて訊いて見る。

『何でもございませうか、大層お頭痛が遊ばすさうで。』

と來た。今更にドキリ!

『ウム左様か……あとをよく閉て寝ろよ』



と、弱味を見せず大將ズツと奥へ入る、此時頗る緊張した心持で。

奥サンは寢間着も着替へず、抱巻を羽織つて、炬燵の上に突伏てゐたが、如何にも重々  
と顔を上げて、お歸り遊ばせとも何とも云はない、其額からこめかみへかけて頭痛膏をべ  
夕に貼つて、眼と眼の間が虫色に蒼く、嚙んだ唇を震はせてゐる。

『何だ未だほんとうに寝ないのか。』

と、郎君氣もない顔で、一生懸命に軽く云つたが、奥サン何うして受答へ様ともしない。  
其唇を嚙むだまゝ、潤んでゐる眼をパチ／＼とやつて、態との様にホロ／＼と涙を落す。  
と亦突伏て了つた。

『オイ／＼何うしたのだい、頭痛がするのかい、オイ元子、元子ツてば、頭痛がするなら  
さつさと寢間着を着替へてほんとうに寝たらいいぢやないか……折角明日稻毛へ行かうと  
いふに……。』

など／＼叱る様な慰める様な調子で云つて見る、が、奥サン猶且突伏た儘で、夜會巻を震

はせるばかりだ。

『オイ元子ツ。』

と遂にはモロに強くムツとした調子で云はざるを得ない——事實に於て嫉妬れる筋はな  
いのだから、

『何とか云つたら何うだい。』

と、聊か亭主關白の位いを見せれば、そこは流石に女で、口惜しさ充滿ながら張は弱く  
涙に濡れた顔を上げて、

『あ、あ、貴郎ツ。』

と怨めしさうに熟つと見詰て、

『い、い、い今何時だとお思ひです、儂は、儂は……貴郎にごまかされてゐるんです……  
いゝえ左様です、左様です／＼／＼、あんまりです／＼、そツそツそりや商賣人は美しい  
でせう、面白いでせう、どうせ、どうせ儂なんか……。』



漸々聲が黄色く高く、涙は潜々として頬を傳ふて來た。

「オイ／＼何をいふのだい、莫迦を云つちやア不可ない。」

「え、どツどうせ儂は莫迦でございますから、貴郎が他所で藝妓なんぞと巫山戯ていらツしやるのを、う、家で寢間着も着かえずに待つてゐるのでございませう。」

「あれ何もおまえを莫迦だとは云やアしないよ。」

「仰有らなくツても儂は莫迦です、え、左様でせうとも、他所の女は伶俐でございませう。」

「弱つたなア、オイ／＼何が他所の女だい……今夜忘年会へ行つただけぢやアないか。」

「へん……何も其處にお隠しなさらなくてもいぢやありませんか、ど、どこの國に這處に遅くまでかゝる宴會がありますものか……そりやたとへ何處へお出にならうとも、儂に明してさへ下されば、儂も女でございます、決してやきもちで申すのぢやございません。」

と捲し立てる奥サンの胸には、郎君と他所の女が睦まじくしてゐる光景が、ハツキリと描けてゐるのだ、踊り疲れて、茶屋の廊下にへたばつてゐる光景などは描け様筈もない。

女中部屋では、女中と小女は囁き合ひ、

「お久さん、お奥ぢや又始まつてゐるよ。」

「左様ね、奥様は随分猛烈ね。」

「ウフ生意氣な口をおきゝでない……だけれども旦那様は、他所に何かお在なのかしら。」

と、女中にも猶且左様想はれると見える、して見ると奥サンの嫉妬の無理はないか？  
ヤレ／＼。

けれども然し、曉方までには何うにかこうにか低氣壓は通り越してゆくのだツた。

## 六

嵐の後の名残の風、胸の雲ゆきすつかり風ぎとはいかないが、其れでも奥サン新調の着